

平成20年度採択 「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

京産大発ファシリテータマインドの風

～ファシリテーションの定着による学生支援改革～

平成22年度

活動報告書

緒 言

文部科学省平成 20 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」の採択事業として F 工房が学内に設立され、早 2 年が経過しようとしている。そうした中、1 年目にはみられなかった新たな動きがあった。

その第一は、多くの学生が F 工房の趣旨に賛同したうえで、F 工房が展開する様々な事業に学生ファシリテータとして参加し、またその多くが定着したことだろう。本年度に開設されたホームページを通じてにせよ、F 工房が提供するプログラムの受益者からの応募というかたちをとるにせよ、ボランティアな意志に基づいてファシリテーションに参入する多くの学生は、私たちの事業を展開するうえで決定的な推進力となった。

こうした学生たちは、プログラムごとに F 工房スタッフとチームを組み、事前の打ち合わせからプログラムの執行、そして事後のふりかえりに至るまでのプロセスに全面的にかかわり、質の高いプログラムを提供するうえで多大な貢献をしたが、そこにとどまらず、彼ら自身もそうしたプロセスを繰り返す中で大きく成長していった。このことを F 工房の側から眺めてみると、学生たちと大人たちとが協働する場を提供することで、これまで以上に精緻なプログラムデザインが可能となり、そこで用いられるファシリテーションの手法も、その場のニーズに沿った、より練り上げられものとなった。プログラムの終了後、自己評価プロセスとしてふりかえりをし、改善につなげることもしっかりと定着してきた。このような創造的な環境が学生たちのめざましい成長につながったといえるのではないだろうか。

地域の若者を受け入れたことも新たな動きといえるだろう。地域の公共機関との協働を通じて、産・学・官・民のセクターを越えた協働を可能にするためのスキルという意味での、ファシリテーションの新たな地平も見えてきた。

以上が本年度にみられた新たな動きであるが、無我夢中で取り組んでいた 1 年目には気付かなかった課題もまた、少しずつみえてきた。これについては「小括」の項で詳述するが、すでに組織にしっかりと根を張っているリーダーシップ型組織文化の中に、支援型アプローチの典型ともいえるファシリテーションをどう定着させるのか、長いスパンの取組みが求められていることは間違いない。

この報告書で用いられる用語

1. F工房事業、ファシリテーションに関連するもの

・知恵袋

F工房の機能のうち、コンサルティングやアドバイジングを行うもの。

・道工具箱

F工房の機能のうち、ファシリテーションツールを備えた、主に学生を対象としたディスカッション・作業用のスペース。また、そこを拠点にした学生活動を意味することもある。

・作業場

F工房の機能のうち、学内外向けに開催される研修や学習会等。専用のスペースを保有している。

・学ファシ

「学生ファシリテータ」の略称。授業や研修などでファシリテーションを実践し、改善や問題提起にも参画する。F工房にとって強い戦力。

・プログラムデザイン

事業目的を効果的に遂行するために考案される空間・時間的デザイン。単にタイムスケジュールを立てるだけでなく、会が行われる場所や道具類の配置等にも配慮が必要である。

・アイスブレイク

初対面どうしなど、自由に発言する関係性ができていないとき、ゲームやワークショップなどを通じて場の雰囲気を和ませ、その後のプログラムを円滑にすすめるために設ける時間、またはコンテンツ。

・ファシリテーションツール

意見表明や合意形成などをよりしやすくするために用いる小道具類。主なものとして極太のカラーマーカー、付箋紙、ホワイトボード等。広義にはアイスブレイク等のプログラムも含む。

・フリップ

ファシリテーションツールの一種。意見やアイデア等を記入し、説明時に相手に見せるために用いる。口頭のみで伝えるよりもわかりやすく、言葉以外での表現(図形など)も可能になる。

・ファシリテーショングラフィック

会議などの際、議題や出された意見を書き出し、共有の助けとすること。また、書かれたもの。議事録とのちがいは、会議の進行と同時性があること、その場にいる全員が見て共有することである。

2. 授業に関連するもの

・PBL

Project Based Learning の略称。企業等より提示された課題を解決する過程を学びの機会ととらえた自己主導型のキャリア教育。小グループによるチーム学習の形態をとることが多い。

・O/OCF

On/Off Campus Fusion の略称。学内での授業(On)と学外でのインターンシップ(Off)連動させた4年間一貫のキャリア(コーオプ)教育。

《F工房でよく使うアイスブレイク》

・サークルコレクション

参加者全員で1つの円となり、体を動かしたり触れ合ったりする簡単なゲームを4~7種類ほど組み合わせさせて実施する。ゲームの種類や組み合わせなどは、事前にある程度決めておくと、その場の雰囲気を見ながら随時アレンジする。

・Common!! Everybody

教室を自由に動きながらできるだけ多くの人とペアになり、お互いの共通点を見つけ、それを各自のシートに記入していく。1ペアにつき1項目ずつ書くことと、一度使ったカテゴリーについては二度と使えないことが特徴。

・たこインタビュー

ペアを作り、他のペアに対してインタビューを行う。その際、インタビューとなる人は一切質問には答えず、ペアの相手方が本人になったつもりで答える(知らないことは空想で)。インタビューが終わったあと、本人が「正解」を答える。

C O N T E N T S

第 1 章 平成 22 年度活動報告

平成 22 年度 F 工房活動実績概要	3
平成 22 年度 F 工房活動実績報告	5
1. F 工房主催事業	5
(1) ファシリテーション研究会・ファシリテータ研修会.....	5
(2) ミニ講座.....	11
(3) ファシリテーション研修合宿.....	16
(4) 平成 22 年度学生支援 GP 中間報告会.....	18
2. 他部門との協力事業.....	33
(1) 学生部 (寮務担当).....	33
(2) 京都産業大学附属高等学校.....	34
(3) その他.....	37
3. 授業への参画.....	39
(1) キャリア形成支援科目.....	39
(2) ゼミ.....	43
(3) その他科目等.....	46
4. 学生活動の支援.....	51
(1) 道具箱活動.....	51
(2) 「学生寮サマーセミナー」実行委員会.....	52
(3) 「O/OCF3 合宿」実行委員会.....	53
5. 他部門・学外への協力.....	53
(1) 第 5 回京都 FDer 塾「授業活性化へのヒント～ファシリテーションとは～」.....	53
(2) 京都市立洛風中学校 3 年生への大学模擬授業体験.....	54
6. 研究会等への参加.....	55
(1) 学生支援 GP シンポジウム「ピア・サポートの継続性と可能性」.....	55
(2) 名城大学第 12 回 FD フォーラム.....	55
(3) 第 8 回高大連携教育フォーラム.....	56
(4) 関西大学 FD フォーラム「これからの大学教育を考える」.....	56
(5) 平成 22 年度大学教育改革プログラム合同フォーラム.....	57
(6) 聖泉大学学生支援 GP 中間報告会「キャリア教育サミット in 滋賀」.....	57
7. 人材育成.....	59
(1) 「ファシリテーション OJT」科目等履修生 (京都未来を担う人づくりサポートセンター).....	59
(2) (財) 地域公共人材開発機構実践研修生受け入れ.....	59
小括 ー平成 22 年度活動をふりかえってー.....	60

第 2 章 参考資料

広報資料	63
ファシリテーション実践現場の写真.....	69
F 工房スタッフ.....	74

第 1 章 平成 22 年度活動報告

平成 22 年度 F 工房活動実績概要 (文中敬称略)

* は、F 工房内でのミーティングの場の提供を意味する。

4 月

- 3 日(土) 文化学部「スターティングセミナー」運営支援
- 7 日(水) 法学部「演習」(岩本) 運営支援
- 8 日(木) 法学部「プレップセミナー」(岩本) 運営支援
- 13 日(火) 法学部「プレップセミナー」(高島) 運営支援
- 19 日(月) 文化学部「基礎ゼミ」運営支援
- 20 日(火) 法学部「演習」(久保) 運営支援
- 22 日(木) 「マネジメント特講(キャリア開発 A)」(松高)、
キャリア形成支援科目「自己発見と大学生活」
(松高)
- 26 日(月) ランチタイムミニ講座「情報共有ワークショップ」、*「キャリア・Re- デザイン I」学ファシミー
ティング
- 27 日(火) ランチタイムミニ講座「情報共有ワークショップ」

5 月

- 7 日(金) *「キャリア・Re- デザイン I」学ファシミーティ
ング
- 8 日(土) ~ 9 日(日)「キャリア・Re- デザイン I」合宿(於
花背山の家)
- 13 日(木) 京都 FD 開発推進センタースタッフ来訪
- 20 日(木) *O/OCF3 学生ミーティング
- 25 日(火) 文化学部「コミュニケーション理論」運営支援
- 27 日(木) *O/OCF3 学生ミーティング
- 31 日(月) 法学部「プレップセミナー」(久保) 運営支援

6 月

- 3 日(木) *O/OCF3 学生ミーティング
- 7 日(月) 法学部「プレップセミナー」運営支援、ランチ
タイムミニ講座「ファシリテーショングラフィック」、* 道
具箱活動学生ミーティング
- 10 日(木) *O/OCF3 学生ミーティング
- 14 日(月) * 道
具箱活動学生ミーティング
- 15 日(火) * 教育
寮サマーセミナーミーティング
- 17 日(木) *O/OCF3 学生ミーティング
- 18 日(金) * 道
具箱活動学生ミーティング
- 21 日(月) *O/OCF3 学生ミーティング
- 22 日(火) * 教育
寮サマーセミナーミーティング
- 24 日(木) *O/OCF3 学生ミーティング
- 28 日(月) 第 5 回京都 FDer 塾 講師(於・池坊短期大学)
- 30 日(水) 第 1 回「学生と教職員が共に考える FD フォー
ラム」

7 月

- 1 日(木) * 教育寮サマーセミナーミーティング、
*O/OCF3 学生ミーティング
- 5 日(月) 京都市立洛風中学校 大学模擬授業体験
- 6 日(火) * 教育寮サマーセミナーミーティング、明治学
院大学教職員来訪
- 7 日(水) *O/OCF-PBL 学生ミーティング
- 8 日(木) * 教育寮サマーセミナーミーティング、
*O/OCF3 学生ミーティング
- 12 日(月) *O/OCF3 学生ミーティング
- 13 日(火) * 教育寮サマーセミナーミーティング
- 14 日(水) ミニ講座「パブリック・スピーキング」
- 15 日(木) * 教育寮サマーセミナーミーティング、
*O/OCF3 学生ミーティング
- 16 日(金) 文化学部「米文化概論」運営支援
ミニ講座「パブリック・スピーキング」
- 20 日(火) * 教育寮サマーセミナーミーティング
- 28 日(水) * 経済学部学生ゼミミーティング
- 29 日(木) * 教育寮サマーセミナーミーティング
- 30 日(金) * 教育寮サマーセミナーミーティング

8 月

- 10 日(火) ~ 19 日(木) 夏季休業
- 23 日(月) ファシリテーション研修合宿下見
- 27 日(金) ~ 30 日(月) 夏季休業

9 月

- 1 日(水) ~ 2 日(木) ファシリテーション研修合宿(於・
松の浦セミナーハウス)
- 9 日(木) 第 16 回 FD フォーラム(大学コンソーシアム
京都) 担当教員来訪・協力依頼
- 21 日(火) 「ファシリテーション研究会・第 10 回ファシリ
テータ研修会」
- 28 日(火) ~ 29 日(火)「京都未来を担う人づくり」合宿
参加(於・マキノパークホテル)
- 29 日(水) 将来塾塾長来訪

10 月

- 2 日(土) O/OCF-PBL 合宿参加(於・マキノパークホテ
ル)、法政大学学生支援 GP シンポジウム参加
(於・法政大学)
- 4 日(月) *O/OCF3 学生ミーティング
- 5 日(火) 地域公共人材開発機構実践研修生受け入れ開始
法学部「演習 I」(久保) 運営支援、*O/OCF3
学生ミーティング

- 7日(木) 「アメリカ文化演習Ⅱ」(小倉)、「大学生生活と進路選択」(松高)、*O/OCF3 学生ミーティング
- 12日(火) *O/OCF3 学生ミーティング
- 18日(月) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」、*O/OCF3 学生ミーティング
- 19日(火) 法学部「演習Ⅰ」(久保) 運営支援
- 20日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業
- 25日(月) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」
- 27日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業、*O/OCF-PBL 学生ミーティング

11月

- 6日(土) ~7日(日) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業(キャリア・デザイン応用合宿)(於・松の浦セミナーハウス)
- 10日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業、*学生 FD 委員ミーティング
- 13日(土) ~14日(日)「キャリア・Re- デザインⅠ」合宿(於・花背山の家)
- 16日(火) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」
- 17日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業
- 24日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業
- 29日(月) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」
- 30日(火) 文化学部「コミュニケーション理論」運営支援

12月

- 1日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業
- 2日(木) 名城大学第12回FDフォーラム参加(於・名城大学)
- 3日(金) 第8回高大連携教育フォーラム参加(於・キャンパスプラザ京都)
- 6日(月) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」、
- 7日(火) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」、寮班長研修プログラム打ち合わせ(学生部寮務担当)
- 8日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業
- 9日(木) *O/OCF3 学生ミーティング
- 13日(月) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」
- 14日(火) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」

- 15日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業
- 18日(土) 関西大学 FD フォーラム参加(於・関西大学)
- 20日(月) ランチタイムミニ講座「対話のコツ」
- 22日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業、*O/OCF-PBL 学生ミーティング

平成23年1月

- 7日(金) 地域公共人材開発機構スタッフ取材
- 12日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業
- 19日(水) 「京都未来を担う人づくりサポートセンター科目等履修生」ファシリテーション OJT 授業
- 24日(月) ~25日(火)大学教育改革プログラム合同フォーラム参加(於・秋葉原コンベンションホール他)
- 28日(金) 附属高校「キャリア・デザイン」プレゼンテーション大会審査員(於・京都産業大学附属高等学校)、*道具箱活動学生ミーティング
- 31日(月) 高大連携プログラム第1回、高大連携プログラム学生ファシリテーターミーティング

2月

- 7日(月) 高大連携プログラム第2回、中間報告会基調講演者視察
- 14日(月) 高大連携プログラム第3回
- 15日(火) 現・新班長合同研修会
- 21日(月) 高大連携プログラム第4回
- 26日(土) 中間報告会「ファシリテーションが芽生く大学キャンパス」

3月

- 2日(火) 「ファシリテーション研究会・第11回ファシリテーター研修会」
- 9日(火) 附属高校「ウォーミングアップ・セミナー」
- 11日(金) 北翔大学生涯学習システム学部教員来訪
- 12日(土) 聖泉大学学生支援 GP 中間報告会参加(於・ひこね市文化プラザ)
- 14日(月) ~15日(火)学生寮新班長合同宿泊研修会(於・松の浦セミナーハウス)

平成 22 年度 F 工房活動実績報告

1. F 工房主催事業

(1) ファシリテーション研究会・ファシリテータ研修会

■ ファシリテーション研究会・第 10 回ファシリテータ研修会

日 時 9 月 21 日 (火) 10:00 ~ 12:00 (ファシリテーション研究会)
13:00 ~ 16:30 (第 10 回ファシリテータ研修会)

場 所 本学 4 号館 4F 演習室

概 要 ファシリテーションに関する知見を深め、ネットワーキングとスキルアップを図るために開催。

「ファシリテーション研究会」では、参加型授業におけるファシリテーションの実践報告および意見交換、「ファシリテータ研修会」では、外部講師を招聘して、大学教育とファシリテーションについての問題整理とワークショップを実施。

内 容 ◎ファシリテーション研究会

1. 参加型授業におけるファシリテーション実践とその効果評価

報告者：北村広美 (F 工房コーディネータ)

学外において担当している授業でのデータをもとに、参加型授業での効果と問題点について分析した事例を報告。参加型授業を導入した单元では学生の参画や満足度が高かった反面、期末試験の結果は座学型の单元に比べて低い傾向にあったことが報告された。問題点として、参加型授業では特に典型的な「正解」がない問いも多くあるため、正解への関心が薄れがちなこと、板書を書き写す等、知識定着のための慣れ親しんだ作業がないこと等が指摘され、ファシリテーションを授業に導入するにあたっての課題が提示された。



2. 参加型教育における、主体性を引き出す場づくり

報告者：川出健一 ((有) 學匠 講師・本学「キャリア・Re- デザイン I」外部ファシリテータ)

キャリア教育における主体性についての話題提供の後、「主体的でない取組みにはどんな弊害があるか」というテーマでグループでのディスカッションを実施。全体で共有、議論した。そこから導き出された議論は「主体的でない取組みのデメリット (本人にとって/チーム (組織やグループ) にとって)」、「そもそも主体性とは何だろうという疑問」に大別され、前

者ではデメリットとしての具体例、後者では何をもって主体性をはかるかという疑問が提示されたほか、主体的でない取組みには本当にデメリットしかないのかという反証も試みられた。

◎第10回ファシリテータ研修会「大学教育とファシリテーション」

ゲストコーディネータ：川中大輔（シチズンシップ共育企画）

アシスタントコーディネータ：鈴木陵（シチズンシップ共育企画）

セッション1「大学教育とファシリテーション」

「ファシリテーションとは〇〇である」

参加者がフリップに〇〇にあたるものを記入し、一斉に提示して意見交換を行う。

「大学でのファシリテーションの使われどころ」

教育（学生支援、授業）、地域貢献、研究、大学運営のフィールドに分類して、それぞれの具体例を講師より提示。各々は個々に独立したものでなく、内容や場面によって複数のフィールドにまたがることもある（学生による社会貢献活動、地域型のサービスラーニング等）。



「ファシリテーションのメリットとデメリット」

参加者がそれぞれに考える「メリット」、「デメリット」をフリップに書いて提示し意見交換。

セッション2「『場』の動きを左右するもの」

「いい場」と「よくない場」を分かちものについて、個人ワークの後、小グループによる共有、さらに全体での共有を図る。参加者の中から書記を募り、模造紙にカラーマーカーで書き留める「ファシリテーショングラフィック」を導入。

セッション3「ファシリテーションの基礎知識」

「ファシリテーションの4つの基礎スキル」

ファシリテータの基本的な技能である「傾聴、観察、質問、介入」のスキルを提示。これは重要度の順にもなっている。

「ファシリテータが理解すべき2つの理論」

体験学習の循環過程：体験→指摘→分析→仮説化→体験…のプロセスによる実践的な学びのフレームワークを提示。



「ジョハリの窓」

対人関係における自己理解の手がかりと信

頼関係を築くプロセスをあらわすマトリックス図。

「自分が分かっている自己」、「自分が分かっている自己」、「他者が分かっている自己」、「他者が分かっている自己」の要素から成り、自己開示とフィードバックにより「自分も他者も分かっている自己」の部分を広げていくことが自分らしさの発現や他者との信頼関係を深める。



参加者 「ファシリテーション研究会」 19名（学生1名、教員2名、職員5名、学外7名、F工房スタッフ4名）

「第10回ファシリテータ研修会」 14名（学生3名、教員1名、職員2名、学外4名、F工房スタッフ4名）

成果 「ファシリテーション研究会」では、ファシリテーションを教育に取り入れることの効果だけでなく、限界や課題を提示することにより、今後の事業展開への示唆が得られた。また、「主体性」をキーワードとした議論では、参加者個々の思いが引き出され、幅広い知見が得られた。

「第10回ファシリテータ研修会」では、内容もさることながら、講義型と参加型の手法をバランスよく用いたプログラムデザインが、大いに参考になるものであった。

■ ファシリテーション研究会・第11回ファシリテータ研修会

(※「第11回ファシリテータ研修会」は本学教育支援研究開発センターとの共催で実施した)

日 時 3月2日(水)「ファシリテーション研究会」 10:00～12:00
「第11回ファシリテータ研修会」13:00～16:30

場 所 本学12号館12201教室

概 要 ファシリテータマインドの学内普及およびファシリテーションに関する研究報告の場を設けることを目的に開催。「ファシリテーション研究会」では本学のキャリア形成支援科目での取組み報告の場とした。「第11回ファシリテータ研修会」では外部講師を招聘し、「授業をどうファシリテーションするか」について講演頂いた後、グループで「より良い授業実践に向けて～ファシリテーションの可能性を考える～」をテーマにプログラムデザインを体験するワークショップを実施した。

内 容 ◎ファシリテーション研究会(10:00～12:00)

～キャリア教育現場からの実践報告～

本研究会では、本学のキャリア形成支援科目である「キャリア・Re-デザイン I (概要は p.39 参照)」の授業から、2つのケースに関する報告があった。

1. 「キャリア形成支援科目におけるファシリテーションの取組み」

報告者: 山田創平(京都精華大学人文学部専任講師、本学全学共通教育センター非常勤講師)

中西勝彦(F工房サブコーディネータ)

内 容: 本報告では、前半は同授業において平成22年度秋学期に実施した事例研究についての発表がなされた。クラス内でのユニークなファシリテーションの取組みやファシリテータがチームとなってプログラムデザインにあたることの重要性が報告され



た。後半は、同授業で実施される個人面談を通して見出される学士課程学生のキャリア形成阻害要因に関する定性的研究の途中経過が報告された。大学への関与が低下する要因としての概念についての説明があり、最後はいかにしてその概念と対峙するべきかという問題提起がなされた。

2. 「アートコミュニケーションを考えるその1 - Dissonance -」

報告者: 入野美香(本学文化学部客員教授)

内 容：本報告では、同授業内のプログラム「アートコミュニケーション」で受講生達が描いた絵について、専門家からの分析結果が報告された。グループで描かれた絵を図画療法の専門家の視点から分析することで、グループ内のダイナミックな人間関係や学生個人が現時点で抱えているテーマが見えてくるなど、大変興味深い指摘がなされた。

◎第 11 回ファシリテータ研修会（13：00～16：30）

～ファシリテーションを取り入れた授業運営～（共催：本学教育支援研究開発センター）

ファシリテーションを取り入れた授業運営に関して、FD 領域も含みながら講演とワークショップの 2 本立てで以下の通り実施した。

1. 講演「(初回) 授業をどうファシリテーションするか？」

ゲスト講師：川面きよ氏（京都FD開発推進センター 専門研究員）

内 容：京都FD開発推進センター（「(公財) 大学コンソーシアム京都」の活動をもとに、京都地域の大学・短期大学が連携してFD活動の充実と大学教育の質の向上を目指す組織）の活動の中での発信や共有された取組み等についての報告があった。京都にある様々な大学・短期大学の先生方が実践されている授業の工夫、画期的な授業運営や授業連携について、教育現場での取組みを客観的に見得る立場にある川面氏ならではの視点からご紹介頂いた。



2. ワークショップ

「より良い授業実践に向けて ～ファシリテーションの可能性を考える～」

川面氏の講演をふまえて、特に大学授業等の【初回授業】もしくは社会教育の場における【導入部】にフォーカスしたワークを以下の流れで行った。

●アイスブレイク

「名前」、「所属」、「初回授業についての想い」を記入したフリップを使用し、その項目について総当たりにペアを変えながら自己紹介を行った。



●グループワーク



「一般教養科目（外国語）／一般教養科目（外国語以外）／専門科目／演習授業／企業の新入社員研修」の5つの授業（もしくは研修）について、その初回授業（もしくは導入部）をファシリテータとしてどうプログラムデザインするのか、をテーマとした。

参加者はそれぞれが興味を持ったテーマに分かれてグループ（3～5名）を編成し、ファシリテーションツール（模造紙、付箋紙、カラーマーカー等）を使用しながら、プログラムデザインすることをゴールに話し合いを行った。

●発表と共有

各グループ5分の持ち時間で、それぞれがデザインした初回授業（もしくは導入部）のプログラムを全体の前で発表し、その後質疑応答や意見交換の時間とした。そして最後に川面氏よりワーク全体に対するコメントを頂き、まとめとした。



参加者 「ファシリテーション研究会」24名（一部参加者含む）

（学生4名、教員5名、職員6名、学外4名、F工房スタッフ5名）

「第11回ファシリテータ研修会」22名（一部参加者含む）

（学生6名、教員3名、職員5名、学外3名、F工房スタッフ5名）

成 果 ◎ファシリテーション研究会

「キャリア形成支援科目におけるファシリテーションの取組み」については、「キャリア・Re-デザインⅠ」の関係者内で取組み内容および課題等が共有される契機となった。今後、論文や学会発表を通して広く一般に発信されることが期待される。

「アートコミュニケーションを考えるその1 - Dissonance -」については、「絵」という非常に繊細なものを取り入れた同プログラムについて再考する貴重な機会になったのと同時に、同プログラムに潜在するリスクについての意見交換を通して、今後のファシリテータとしてのかかわり方についての示唆を得た。

総じて、本研究会は、「キャリア・Re-デザインⅠ」について、そこにかかわる担当者以外にも、同授業の取組みおよびその意義を発信する機会となった。また、キャリア教育におけるファシリテーションの重要性を広く一般に発信するための第一歩とすることができた。

◎第 11 回ファシリテータ研修会

川面氏の講演では、学内にいながらにして他大学の様々な取組みの概要を知ることができる良い機会となった。

後半のワークショップでは、立場の違う人たちが意見を出しながら、初回授業（もしくは導入部）のプログラムについて議論する中で、そこに潜む様々な課題が指摘された。コンテンツとプロセスの両面においてファシリテーションを取り入れたプログラムを通して、ファシリテータマインド醸成の一助となった。また、本ワークショップで提案された「初回授業（もしくは導入部）のプログラム」については、今後それらをまとめて学内および学外へと発信する予定である。

(2) ミニ講座**■ 情報共有ワークショップ**

日 時 4月26日(月) 12:20～13:00
4月27日(火) 13:10～13:50

場 所 F工房(作業場、工具箱)

概 要 グループメンバーがもっているさまざまな情報を共有して、課題を達成するワークショップ。メンバー間の情報共有と自主的な参加を促すことを目的とする。「キャリア・デザイン基礎」担当職員ファシリテータ研修を兼ねて開催。

内 容 1. 各々のメンバーに断片的な情報を書いたカードを渡す。
2. メンバーは、書かれた情報を共有しながら、そこに隠された前提条件を解く。
3. 実施後、メンバーどうしで、ワークに取り組む姿勢やチームビルディングに必要なスキルについて意見交換を行う。

参加者 のべ11名(学生5名、教員1名、職員5名)

成 果 メンバーが協力しながら課題を解決していくことによって、チームビルディングの必要性を実感してもらえた。特に、「キャリア・デザイン基礎」担当職員ファシリテータにとっては、同様のワークを授業内でも実施することから、シミュレーションの機会とすることができた。



■ ファシリテーショングラフィック

- 日時 6月7日（月）12：30～13：00
- 場所 F工房（作業場）
- 概要 大学内での活用度が高い、ホワイトボードによる議事記録に特化した実習型ワークショップ。
- 内容
1. メンバー内よりファシリテータ（書記を兼ねる）を選出（今回は2名）。
 2. テーマ（「学食の改善案」、「今度の日曜にメンバー揃って何をするか」）についてメンバー全員で話し合う。ファシリテータは出てきた意見を、参加者にわかりやすいようにホワイトボードに記録してゆく。
 3. ファシリテータ、メンバーそれぞれの立場から成果物（議事録）を評価、意見交換を行う。
- 参加者 6名（学生6名）
- 成果 実際に参加者自身がホワイトボードに書いてみることで、ファシリテーショングラフィックの効用と難しさを実感することができた。しかし時間の都合上、全員が実習できなかったため、シリーズ化するなどフォローの方策が必要である。



■ 「人前で話そう」～パブリック・スピーキングへの誘い～

- 日時 1回目：7月14日（水）14：00～15：30
2回目：7月16日（金）17：00～18：30
- 場所 F工房
- 概要 F工房道具箱活動（p.51参照）の一環として、学生ファシリテータが企画、運営を担当。ファシリテータとして必要なスキルである「パブリック・スピーキング」について、体験とふりかえりを通して、そのスキル向上を図るイベント。公の場や人前で話すことの意味を考えながら、参加者それぞれが一流の「パブリック・スピーカー」になることをゴールに実施した。

内 容 本イベントはランチタイムではなく、90分をかけて以下の通り実施した。

① 1分間で自己紹介をしよう

1分間の長さを体験しながらの自己紹介を実施。

② 魅力的な「パブリック・スピーキング」についてディスカッション

そもそも「パブリック・スピーキング」とは何なのか。どのようなスピーチが魅力的なのかを参加者でディスカッション。

③ テーマにそった5分間スピーチプランを考えてみよう

出されたテーマ（1回目:「わたしの趣味」、2回目:「わたしの好きな場所」）について5分間で話せるようスピーチプランを考える。

④ いざ、パブリック・スピーキング!!

参加者の前で、テーマについてのスピーチを実施。時間は5分を厳守。

⑤ 他の人のスピーチについてお互いにフィードバックし合おう

参加者がお互いのスピーチを振り返り、お互いに「どこが良かったか」「課題はどこか」を指摘し合い、今後につなげる。

参加者 1回目: 2名 (学生1名、F工房スタッフ1名)

2回目: 4名 (学生3名、F工房スタッフ1名)

成 果 学生ファシリテータが企画から当日の運営までを担うことで、ファシリテータとしての様々な役割に触れる機会となった。一方で、実施時期や時間帯、広報活動に関する課題が浮き彫りとなった。



■「対話のコツ」 ～“話し上手”、“聴き上手”をめざそう～

- 日時 第1回 10月18日(月) 12:30～13:00
第2回 10月25日(月) 12:30～13:00
第3回 11月16日(火) 13:10～13:40
第4回 11月29日(月) 12:30～13:00
第5回 12月6日(月) 12:30～13:00、12月7日(火) 13:10～13:40
第6回 12月13日(月) 12:30～13:00、12月14日(火) 13:10～13:40
第7回 12月20日(月) 12:30～13:00
* 10月19日(火)、10月26日(火)、11月15日(月)、11月30日(火)、12月21日(火)は参加者なしのため中止

場所 F工房(作業場、道具箱、知恵袋)

概要 ファシリテーションの最重要スキルの一つである「対話力」を高めるための連続講座。ペア、グループ、ファシリテータのそれぞれ違った形で対話を体験しながら対話のコツを身につけ、より「話し上手」「聴き上手」な自分をめざす。

内容 第1回 1対1で話そう【導入編】

1対1で話すときの「型」「ふるまい」の基本を実践し、対話を効果的にすすめるための「問いかけ方」「相槌の打ち方」「対話の掘り下げ方」についての小講義とミニワーク。



第2回 1対1で話そう【実践編】

対話の「型」を意識したワーク「ヒーローインタビュー」を実施。

第3回 みんなで話そう【導入編】

3人以上で話すときの「型」「ふるまい」についての小講義とミニワーク。

第4回 みんなで話そう【実践編】

F工房内のさまざまな場所を利用して、3人以上で話す場合の「場」について検証。

第5回 対話をファシリテーションしよう【導入編】

会議など、ファシリテータがいる場合の席の配置やファシリテータの居場所などについての小講義。

第6回 対話をファシリテーションしよう【実践編】

小グループを作り、第 5 回で検討した場のデザインについて F 工房内の場所を利用して実践。

第 7 回 対話をファシリテーションしよう【フォローアップ編】

参加者をランダムにグループ分けし、その中からファシリテータを選出し、議事を運営。また議論を「見える」ものにするためのファシリテーショングラフィックの実習も実施。



参加者 のべ 74 名（学生 60 名、職員 10 名、その他 4 名）

成 果 長期間にわたるシリーズとしたことで、あらゆる対話のタイプにふさわしいファシリテーションの方法を学び、実践することができた。

12 月実施分は、平成 23 年度学生寮班長にも参加を促し、その後の研修へとつなげることができた。

(3) ファシリテーション研修合宿

日時 9月1日(水) 11:00～9月2日(木) 12:00

場所 京都産業大学 松の浦セミナーハウス

概要 F工房で活動している人だけでなく、ファシリテーションに興味がある人、これからかかわりたい人等を広く対象に、1泊2日でさまざまなワークショップや議論を通してファシリテーションに関する知見と技術を高めることを目的として実施。

内容 ◎オープニングゲーム：Common!! Everybody

任意のペアを作り、お互いに自己紹介しながら共通点を探しあうゲーム。

◎導入実習：ファシリテーショングラフィックの基礎

◎ファシリテーション実習(1) チームビルディング・プログラムを考える

4つの課題(必修1つ、任意3つ)を提示し、それぞれの状況において、メンバー間の関係性を向上させ、パフォーマンスを高めるための方法をグループごとで考えるグループワーク。

◎松の浦クエスト2010夏 ver.

セミナーハウス周辺のさまざまな課題をクリアしながらチームビルディングを行う野外型ワークショップ。前年度の合宿で実施したものを改善。



◎松の浦クエスト・まとめの会

松の浦クエストでの経過や結果をまとめ発表することで、ワークのふりかえりと情報の共有を行うとともに、プレゼンテーションスキルのトレーニングとする。

◎ファシリテーション実習(2) ワークショップデザインをつくる

教育関連のワークショップを開催すると仮定し、その運営プランを立案する。具体的な進行デザインを作成することで、ファシリテーションの実践力を身につける。



◎ファシリテーション実習 (3) ワークショップの報告

ファシリテーション実習 (1) (2) の成果を報告し、全体での共有をはかる。プレゼンテーションのスキルの向上と情報共有、および相互評価の機会とする。

◎ディスカッション「京産大・ファシリテーションの効きどころ」

学内でファシリテーションが使えるような場面、使ってよかった場面などについて意見交換し、今後のF工房の活動の参考とする。

参加者 18名 (学生12名、教員1名、職員1名、F工房スタッフ4名)

成果 合宿という非日常の場で、普段からF工房にかかわりのあるメンバーと、合宿で初めてF工房にかかわったメンバーとが、ワークショップや共同生活を通じて交流する中で、「ファシリテーション」をキーワードにじっくり考え話し合う機会とすることができた。また、京産大でのファシリテーションの効きどころが新たな視点から指摘されたほか、今後につながる確かなネットワークを構築することができた。



(4) 平成22年度学生支援GP中間報告会

平成22年度 学生支援GP中間報告会

「ファシリテーションが芽生^{めぶ}く大学キャンパス」

日時 2月26日(土) 13:00～16:30

場所 本学8号館2階「キッチンみつばち」

概要 今年度のF工房での取り組みや成果を広く社会に還元すると同時に、ステークホルダーに活動の全体像を提示することを目的に開催。プログラムの詳細は以下の通り。

●開会挨拶・開催趣旨説明 鬼塚哲郎(本学文化学部教授 / F工房事業統括)

●第1部「ファシリテーション、鳥の目と虫の目」

1. 基調講演「主体的な学びとファシリテーション」

大本晋也(兵庫県教育委員会事務局 社会教育課 主任指導主事兼社会教育係長)

2. 活動報告「ファシリテーションが芽生(めぶ)く大学キャンパス」

鬼塚哲郎(本学文化学部教授 / F工房事業統括)

●第2部「お試し! F工房」

	知恵袋	道具箱	作業場
14:20～15:00	「ゼミでのファシリテーションの導入例」	「タンキュー! アイスブレイク(1)」	「授業中の私語について語ろう(1)」
15:00～15:10	休憩・移動		
15:10～15:50	「学ファシ大いに語る」	「タンキュー! アイスブレイク(2)」	「授業中の私語について語ろう(2)」

●第3部「学びを分かち合おう ～共有とまとめ～」

●閉会挨拶 若松正志(本学文化学部教授 / キャリア教育研究開発センター長)

参加者 合計53名(学外24名、学内24名、F工房スタッフ5名)

第1部 「ファシリテーション、鳥の目と虫の目」

概要

第1部の前半は基調講演とし、「主体的な学びとファシリテーション」をテーマに大本晋也氏にご講演頂いた。一般的な講演とは違い、参加型ワークを多く取り入れたファシリテーションらしいスタイルと、F工房にとって「鳥の目」からアプローチ頂く内容であった。後半は「虫の目」から、「ファシリテーションが芽生(めぶ)く大学キャンパス」をテーマに、今年度のF工房の活動報告を行った。

1. 基調講演 「主体的な学びとファシリテーション」

講演者：大本晋也（おおもとしんや）氏



● 自己紹介、概要説明

兵庫県教員として高等学校勤務。その後、国立淡路青年の家専門員を経て、現在は兵庫県教育委員会事務局 社会教育課主任指導主事兼社会教育係長。「ボランティアとファシリテーション」をキーワードに、シチズンシップ共育企画運営委員等、様々な活動をされており、高校生、大学生、社会人等を対象としたワークショップに企画し、ファシリテータとして現場主義を貫いているとの紹介があった。その後、本報告会全体の約束事として「やわらかい頭と心」でセッションを楽しんでほしい旨お話された。その後、本講演の概要説明があった。これら一連の説明に関して、大本氏はキーワードをフリップに書いたものを順にホワイトボードに貼りつけていく形で行われた。また、第2部のセッションへ誘う内容となるようにデザインされた本講演は、以下の通り実施された。

● 市場調査「人間ドットマップ」

参加者は講演会場横の床に十文字に貼られたテープコーナーへ移動して実施。

最初に練習として「血液型」ごとに象限を割り振り、参加者は自分の該当する場所へ移動した。巧みなアイスブレイクに皆の表情が次第に和らぎ相互の笑い声、話し声も聞こえた。

続いて、直交する2本の線からなるマトリックスの横軸に「ワークショップへの参加度」、縦軸に「ファシリテータとしての経験値」を設定し、参加者は自己評価で自分が該当する場所へと移動した。

● 自己紹介タイム

そして、初心者象限（横軸、縦軸ともに「少ない」と自己評価した人がいる場所）にいる参加者から順に自己紹介を行った。受付時に配付したフリップを半分に折り、上半分に「所属と名前」、下半分に「ワークショップとは…」について、事前に書いておいたコメントをそれぞれが披露しながらの自己紹介となった。フリップトークをする人はその場に立ち、聞き手は座るというスタイルで全員が順に自己紹介を行い、参加者の個性あふれる紹介トークに一気に場の不安と緊張は解消された。

その後、参加者で一つの輪になり1, 2, 3, 4……とナンバリングをしていき、4グループに分かれ、講演会場に戻った。そしてさらにそのグループを2つに分け、1グループ5名ほどのグループとなった。

● フリップトーク「これってワークショップ？」

グループに分かれた後、個人で「これはワークショップだ」、「これはワークショップではない」と思うものをそれぞれ考え、フリップに書いていった。その後、グループ内で

共有を行った。参加者はワークショップやファシリテーションをそれぞれの立場で既実践しておられる方、または導入に関心を持っておられる方が多く、どのグループも活発な意見交換が行われた。



● 全体共有とまとめの時間

グループでの話し合いの後、各グループで話し合われた内容を前のホワイトボードに貼り出し全体で共有した。

その後、本講演のまとめとして、「主体的な学びとファシリテーション」についてキーワード化したフリップを、順にホワイトボードに貼り出し説明された。

学習者中心主義の観点からファシリテータが担うべき役割は、「それぞれの中にある答え」を引き出し、まとめ、行動させることである。その意味で、「ファシリテータは『産婆さん』」である。ワークショップは、学び手が自ら探り求め学ぶための非日常の場であるため、「結界(空間設定、人的要素、約束事など)」が必要となる。その点でファシリテーションは、「配る(目配り、気配り、心配り)」ことが重要になってくる。ワークショップは「実験工房」であり、まさに京都産業大学のF工場の取り組みと重なる、とのお話があった。

最後に、「ワークショップとは」、「ファシリテーションとは」を考えながら、第2部の分科会に参加してほしいとのお話とともに、和やかな雰囲気での基調講演は終了した。

成 果

大本氏による講演は、一般的な講演スタイルではなく、本報告会の開催趣旨を踏まえつつ、参加者と対話しながらフラットな関係性を意識させるしかけがあり、アイスブレイクの役割や第2部に続く雰囲気を創出された。また、演者のスタンスや振舞いなどを通して、ファシリテータマインドに多く触れる機会となった。



2. 活動報告「ファシリテーションが芽生(めぶ)く大学キャンパス」

内容

本年度のF工房の活動について、以下の4項目に整理して報告した。

1) はじめに

学外関係者に向け、本学の特徴（規模、学部、研究科、ワンキャンパスであること、科目履修に関して学部間の垣根が低いこと、キャリア教育に注力していることなど）を説明した。



2) F工房設立の理念

F工房は、3つの機能【知恵袋（コンサルテーション）、作業場（ワークショップ開催）、道具箱（ファシリテーションツールの開発）】を通じ、低単位・低意欲の学生層のモチベーション再発見、就学支援、キャンパス内での居場所づくりなどを支援することで、当該の学生層およびその他の学生層における有能感の醸成と自律への促しを目的として設立されたことを説明した。

3) キャンパスに芽生つつあるファシリテーション

設立後2年目にあたる本年度、ファシリテーションが本学キャンパスに少しずつ定着しつつあること、またその例として、以下のような活動を報告した。

- ①ミニ講座「ファシリテーショングラフィック」「対話のコツ」（p.12、14 参照）
- ②ファシリテータ研修会（p.5 参照）
- ③キャリア形成支援科目の授業支援（p.39 参照）
- ④初年次演習の運営支援（p.46、49 参照）
- ⑤演習の運営支援（p.43 参照）
- ⑥高大連携プログラムの運営支援（p.34 参照）
- ⑦寮班長研修プログラムの企画・運営（p.33 参照）



4) 見えてきた課題

設立後2年目の諸事業を実施するに当たり、ファシリテーションの普及が当初の目論見ほど迅速には進んでいないことが指摘された。またその背景として、大学内の教室、各部署、課外活動の場などにおいては、伝統的な指導・管理型リーダーシップやマネジメントを基盤とする組織文化が定着しており、理念的にも歴史的にもこれらの価値とは異質な支援的関係性に基盤を置くファシリテーションが介入できる余地はそれほど大きくないと考えられていることが指摘された。

成 果

1. 学内外のステークホルダーに対し、本学におけるファシリテーションの実践例を、F工房主催のものと他部署との協働によるものに分けて提示することで、F工房の活動を端的に示すことができた。
2. ファシリテーションを取り巻く本学の環境を端的に示すことができた。具体的には、ファシリテーションの普及を阻害している要因として、支援型でなくむしろ指導・管理型のリーダーシップが教職員から学生に向けて一方的に発揮されているきらいがあること、を示すことができた。参加者からは「支援と指導・管理の対比はおもしろかったし、参考になった」との声が寄せられた（参加者アンケートより）。

課 題

1. 時間の制約もあり、F工房が具体的にどう運営されているかを示すことができなかった。
2. 指導・管理型のリーダーシップと支援型のファシリテーションとがどう共存していくか、その見取り図を提示することができなかった（アンケートに、これらの概念は対立するのではなく、共存するものとの指摘があった）。これは来年度に向けての課題と捉えたい。

第 2 部 「お試し! F 工房」

概 要

第 2 部では分科会形式をとり、ファシリテーションを参加者どうしで体験することを目的に、会場で F 工房の 3 つの事業である「知恵袋」「道具箱」「作業場」を模したブースを設定し、各機能に準じたワークショップを実施した。1 回 40 分のセッションを 2 セット行い、前半と後半で別の分科会に移動することも可能とした。

■ 「知恵袋」ファシリテーション実践者との体験共有

セッション 1 「ゼミでのファシリテーションの導入例」

報告者 久保秀雄（法学部ゼミ担当教員）、三木瑛里子（法学部 3 年次生）

進 行 北村広美（F 工房コーディネータ）

参加者 19 名

北村よりセッションの概要説明があり、報告者自己紹介の後、以下の内容で進行される。

ゼミ概要紹介

（久保）法学部の 3 年次生中心のゼミ。多種多様な裁判外紛争処理の方法を取り上げ初歩から学習している。表面的に「知る」だけでなく体感して深く「分かる」ことを目指し、文献内容が本当に使えるのか実験の形でロールプレイングゲーム、シミュレーションなどを通し高度な専門知識が身に付き使えるように体験型のゼミ運営をしている。

なぜ久保ゼミを選択したのか

（三木）法学部では、2 つのゼミが履修できる。久保ゼミは古風な上、主体的にかかわれるゼミとは思えず迷ったが、裁判の傍聴に興味持ち受講を決める。もう 1 つのゼミは先輩のゼミ紹介で団結を感じ、文化祭参加や課外活動に参加しており興味を持った。

F 工房、ファシリテーションという言葉にどこで出会ったか

（久保）F 工房での学生のネットワークやソーシャルネットワークそしてファシリテーションスキルがゼミ運営に生かせるのではと興味関心を持っていたが、イメージが湧かなかった。F 工房の存在はパンフレットなどで知っていた。

ゼミにファシリテーションを取り入れようと思ったきっかけは

（久保）ゼミ担当 2 年目。私がゼミを仕切り、中央集権的に運営する。教員と学生のかかわりはよく、学生どうしの関係は駄目だった。発言を振ると話すが学生からはなかった。運営を学生に委ねようとしたが中央集権的、放任、丸投げでは駄目であった。若手教員で共同研究をしている、そこでのワイワイ、がやがやの楽しさをゼミ学生にも味わわせ



るには、アイスブレイクやファシリテーションが自分たちのトラブル解決のテクニックとして活用出来ると確信する。F工房を訪れそれらのノウハウが蓄積されていることを知りF工房に授業参画をお願いした。

久保ゼミ活性化のためにF工房がどのようにかかわったか（導入例）

（北村）アイスブレイク（伝言スケッチ・4コマストーリー）、模擬調停「アパートの住人どうしのもめごと」をテーマに2週にわたりロールプレイングゲームを実施した。

【導入例『うまくいったこと』、『いかなかったこと』】

（久保）今年のゼミ運営は大成功だった。学生は私が困るくらい主体的になり「2月以降もゼミをやってくれますか」との声も出る。コンパの場で盛り上がるのではなく、新しいチャレンジで主体的にアイデアを出し学生相互の学びを刺激しあうプロセスが楽しいというコミュニティができた。F工房にかかわってもらいながら成果を上げることが出来た。

久保ゼミの最初の印象と今とでは変わりましたか

（三木）こんな風になるとは思ってもいなかった。以前のゼミ運営を期待して受講した学生も、入っていきける雰囲気を作れていた。自分たちで改良してゲームを作るというサイクルができたと思う。

【フロアからの質問】

F工房の組織について

学生ファシリテータは、その都度学生有志を募る。ファシリテーション講座などへの参加の機会を作り学んでもらう。授業、研修など実際の場で学びを積み上げてもらっている。参加プログラムを運営する職員や教員と実施プログラムを共有する場を設定し、実施後のふりかえりの場を設定し学びの場としている。他にゼミや研修に参加したことがきっかけで担当教員やF工房スタッフから声を掛けられたり、ファシリテーションに興味を持って参加したりする学生もいる。



参加した学生ファシリテータに単位は出ますか

単位や時給などの対価はなくボランティアとして参加している。本日の報告会にも9名が参加してくれている。

学生ファシリテータの活動のために何が必要か

ファシリテータ相互の関係性と居場所が必要。そのコミュニティの場としてF工房が生まれた。

（北村）貴重なご意見ありがとうございます。報告会終了後お時間がありましたらF工房をご案内します。

セッション 2 「学ファシ大いに語る」

報告者 釜場正起（外国語学部 2 年次生）、浅野光紀（経営学部 1 年次生）

進行 橋本正美（F 工房副統括）

参加者 13 名

自己紹介と学生ファシリテータとして活動するきっかけは（釜場）1 年次の「キャリア・デザイン基礎」科目で学生ファシリテータとして活躍する先輩の話聞き、授業後、話をもっと聞きたくて先輩にその旨話すと F 工房に誘われ、行ってみたのがきっかけだった。

（浅野）この秋学期受講した「O/OCF-PBL」科目でアイスブレイクを運営するスタッフが、F 工房スタッフである



ことを知り、F 工房の存在を知った。今年に入り大学の学生向け電子掲示板「POST」で附属高等学校との連携授業に参加する学生ボランティアについて F 工房からの募集案内を見て、初めての学びに興味を持ち参加することに。2 月の高大連携授業で学生ファシリテータとしてデビューした。

あなたにとって F 工房、学生ファシリテータはどのような意味を持ちますか

（釜場）他の大学の受験に失敗し、たまたま受かって本学に入学し、大学で学ぶことへのモチベーションが低い状態だったが、F 工房の学ファシとしてかわりを持つようになり大学に自分の「居場所」ができ、授業がなくても学校へ来るようになった。また、主体的に学ぶという面でも専門科目では受け身になってしまう。主体的に学ぶ場がなかなか見つからない中で、F 工房は貴重な場になっている。ここでの学びが他の場での学びにつながっている。

（浅野）専門科目では受講したい科目が配当曜日や時限で制限されたり、自分が想像しているのとは授業内容が違ったりする科目もある。共通科目やキャリア関連科目の授業は主体的に学べ楽しい。F 工房でのファシリテータとしての学びは自分にとって初めての経験。意外と大変な役割であることも知った。

【フロアからの質問】

学生ファシリテータは、どのような学生で構成されているのか

現在約 20 名が活動している。卒業で常に入れ替わり、年度途中での参加もある。キャリア形成支援科目受講生が、学ファシとして活躍する先輩に触発され参加するケースが多い。

報告者がキャリア形成支援科目を受講した理由は

大学生活や将来のこと、何かを身につけたいという思いと主体的に学びたいと「キャリア・Re-デザイン I」を受講。形のあるものを学ぶというより、テーマに沿って何かを学ぶというシラバスに興味を持つ。大学にこんな授業があるのかと印象強かった。

ファシリテータとして授業運営で大切にしていることはグループワークでは、一人ひとりに寄り添うこと、引張るよりアドバイス、落ち着いて観察を心がけている。活動を通して将来像として見えてきたものは
(1) NPOやNGOで活躍する。(2) 教員を目指す。



成 果

セッション1では、F工房の取組みのうち、授業等への参画に関しては、それが深く静かに浸透していることを伝えることができた。授業へ出向きそこでの教員や受講生との対話を通して、ともに授業をつくっていくモデルを提示する機会となった。

また、セッション2では、まだ経験の浅い低年次学生が自らのファシリテーション経験をふりかえり自分の言葉で語ることで、学生ファシリテータが高意欲層の学生からなる特別な存在ではなく、一見どこにでもいそうな普通の学生が行っている活動であることを発信できた。

■ 道具箱セッション「タンキュー！アイスブレイク」

概 要

ワークショップの導入として欠かせない「アイスブレイク」について、それを参加者で体験した後、その取組みをふりかえりながらアイスブレイクの本質を探求することを目的に実施。《セッション1》では全体での一体感を得るためのアイスブレイクを、《セッション2》では、自己紹介をより深めるためのアイスブレイクをそれぞれ実施した。

内 容

セッション1

本セッションは、主に参加者全体での一体感を重視したアイスブレイクを実施した。全員で体を動かしたり、触れ合ったりしながら、初対面どうしのかたい雰囲気をはぐしていくことを念頭においたアイスブレイクを体験し、その後ふりかえりを行った。

●アイスブレイク体験

「サークルコレクション」

参加者が円になって行うゲームを組み合わせたアイスブレイク。順番は以下の通り。

- ①「ラインナップ」(テーマ＝「自宅から京産大までの所要時間」)：自宅から京産大までの所要時間順に並ぶゲーム。しゃべらずに実施。
- ②「パチン」：起点となる人から隣の人へ順に拍手を回していくゲーム。



- ③「キャッチ」：右手人差し指を右隣の人の筒状にした左手に上から入れる。ファシリテータの「キャッチ」という合図で、人差し指は上に逃げ、左手は相手の人差し指を逃がさないようにキャッチするゲーム。
- ④「目隠しマスゲーム」：全員が円になって手をつなぎ、目をつむった状態で、制限時間内に三角形をつくることをゴールに行うゲーム。

●ふりかえりワーク

「『アイスブレイク』日本語化選手権」

体験したアイスブレイクに関する印象を各自が付箋紙を使って出し合い、それをもとに「アイスブレイク」に最も適当と思われる日本語を考えるワーク。最後はアイスブレイクの様子を終始観察していたファシリテータの独断と偏見でもって、最優秀賞を決定することで、ファシリテーション的な話し合いと、それを阻害するものの例としてのトップダウン型の決定とを比較体験した。



出し合ったキーワードとして「リラックス」、「親しみ」、「コミュニケーション」、「気構えずに参加」、「ぬくもり」などがあつた。その上で、アイスブレイクを日本語化してみると「寄せ鍋のひとつとき」や「糸ほぐし」、「自然な“笑い”」などが出された。

セッション2

本セッションでは、主に自己紹介に特化したアイスブレイクを実施。自己紹介に少しのゲーム性を持たせることにより、単に名前と所属だけを言い合う自己紹介よりも、もう一段階深くお互いのことを知り合えるワークを参加者で体験し、その後ふりかえりを行った。



●アイスブレイク体験

1. 「Q & A」

参加者各自がこの場にいるメンバーに聞いてみたいことを付箋紙ののり付けされている面に1人最大3枚まで書く。質問を書いた付箋紙は前のホワイトボードに貼り付ける（すると書いた面は見えなくなる）。その上で、参加者を2つのグループ（6名と5名）に分け、メンバーが1人ずつ前のホワイトボードから好きな付箋紙を1枚取って席に戻り、その質問に対する答えを語りながら自己紹介を行うワーク。



2. 「ウソつき自己紹介」

1回目とはメンバーを入れ替えた2つのグループで行った。個人でA4の白紙に2つの自己紹介のトピックを書く。そのうち1つは自分に関する真実を書くが、もう一つはウソの項目を考え書く。その後、グループ内で順に2つの項目について紹介を行い、他のメンバーはそのうちどちらがウソかを当てるゲーム。解答が終わったら、自己紹介者はウソの項目（正解）を発表した上で、真実の項目に関する説明や、なぜそのウソを書いたのかについて紹介することで、より深い自己紹介を実現することができるというもの。

●ふりかえりワーク

「『アイスブレイク』日本語化選手権」

体験したアイスブレイクに関する印象をもとに、各自が「アイスブレイク」に最適と思われる日本語を付箋紙に書き出した。その後、なぜその日本語にしたのかについて、全体で意見交換を行い、参加者の投票でもって最適な日本語を決定した。しかし最後は、アイスブレイクの様子を終始観察していたファシリテータの独断と偏見で、最優秀賞を決定した。ねらいは《セッション1》と同様に、ファシリテーション的な話し合いで決定したことと、それを阻害するものの例としてのトップダウン型の決定とを比較体験するためであった。



出された日本語として「啓蟄」、「祭り」、「笑機」、「ゆるんだ“わ”（輪、和）」、「メンバーの個性&魅力発見！」などがあった。その中から参加者の投票で選ばれたのは「祭り」であった。「祭り」という言葉の中には、誰でも参加できる雰囲気であることや、知らない人どうしであっても一緒に盛り上がることなどができるなどの意味が込められている。

参加者 セッション1：9名
 セッション2：11名

成 果

初対面の組み合わせも多い参加者どうしで「アイスブレイク」が実施できた。同時に、普段はふりかえることをしない「アイスブレイク」において、そのプロセスを参加者およびファシリテータでふりかえることで、「アイスブレイク」の場で起こっていることをそれぞれの立場から言語化でき、「アイスブレイク」の効果を確認することができた。

■ 作業場セッション「授業中の私語について語ろう」



概要

FD 領域の主要テーマのひとつである「私語」を取り上げ、「私語」はそもそもコントロールすべきものか、すべきとすれば誰がやるのか、どうすればコントロールできるか、についてディスカッションした。ディスカッションのツールとして、A4の紙にキーワードを書いてもらい、整理しつつ模造紙に貼り付けていく方法を取り、議論の流れが可視化されるよう工夫した。

内容

セッション1

1. 自己紹介を兼ねつつ、私語について何を語りたいか、をプレスト風に共有した。
2. その後、「私語」はそもそもコントロールすべきものかどうかを議論するため、私語がもたらすものを A4の紙に書いてもらい、付箋紙風に模造紙に貼り付けつつ整理した。その結果、私語はネガティブな効果だけでなく、ポジティブな効果をもたらすことが指摘された。またここでの重要な気付きとして、受講生の中で私語が発生するのは、それなりの背景なり原因なりが存在することが示唆された。
3. 次に、参加者の実践している、もしくは考え付く私語対策を、やはり A4の紙に書いてもらい、整理しつつ模造紙に貼り付けていった。出されたキーワードを大別すると、1) 教室の大きさや座席指定など授業環境の整備にかかわるもの、2) 初回授業での工夫や講義の中に受講生への問いかけを多く取り込むなど、私語の予防を視野に入れた授業の組み立てにかかわるもの、3) 個別の私語に対する対策、の3つに分類できた。

セッション2

後半のセッションにおいては、自己紹介の後、ファシリテータの判断により、《セッション1》で時間の都合で議論できなかった「私語はそもそもなぜ生じるのか?」という問題に取り組むことにした。参加者の見解を A4用紙に書いてもらい、模造紙に貼り付ける方法で共有したが、その結果、私語には1) 授業コンテンツの文脈に沿ったもの、2) 授業コンテンツとは無関係のもの、の2種類があることが指摘された。同時に、1) の場合を「私語」と呼ぶのは不適切であること、質問や発言というかたちで授業コンテン

ツに取り込まれてしかるべきものであること、が指摘された。2) の場合は、その背景として、①教員側に熱意が不足している、もしくは授業運営のスキルが未成熟である、②受講生側に授業内容に対する興味や関心が薄い、③興味・関心はあっても、そばにいる仲間・友人とのコミュニケーションを優先する、が指摘された。いずれの場合も、2) においては「教員と受講生の間の対話（ダイアログ）が成り立っていない」ことが指摘された。

最後に、上記の1) 授業コンテンツの文脈にそって受講生間で語られる（授業に未だ取り込まれていない）「ポジティブな私語」は誰がどこにどう回収すべきか、を議論した。その結果、①質問してもらおう、②グループワークなどを通じて「ポジティブな私語」を「ローカルなディスカッション」に発展させる、③パーキング・ロット（駐車場＝その場で結論にはつなげず、当面収納しておくためのスペース）に入れておく、などの案が出された。

参加者 セッション1 13名、セッション2 13名

成 果

セッション1

1. A4用紙をフリップ兼大型付箋紙として用いたことで、教員・職員・学生などの立場を超えた、フラットな雰囲気の中でディスカッションすることができた。
2. 「私語がもたらすもの」について以下のようなキーワードおよびカテゴリを得た。
 - 1) モラルハザード・学習権の侵害
教員の声が聞こえなくなり、授業の妨げとなる／私語をしない学生の意欲・集中力を低下させる／学ぶ権利を侵害する／大学に対する失望を生み出す
 - 2) 授業コンテンツへのポジティブな反応
新しい発見の共有と確認／わかりにくいところ、もっとよいアイデア／連帯感が生まれる
 - 3) 私語の再生産
私語を放置すると、「私語はしてもいい」という意識が生まれる
3. 私語対策のツールについて、以下のようなキーワードおよびカテゴリを得た。
 - 1) 授業環境＝私語の生じにくい環境の創出
適正規模／座席指定
 - 2) 予防策＝授業のデザインを工夫する
初回授業での私語をしにくい雰囲気づくり／メリハリのある授業運営
 - 3) 個別の対策＝授業の流れを止める
そばに行く／注意する／話を聞いて授業につなげる／イエローカード、レッドカードを出す／話を止める

セッション 2

1. セッション 1 と同様、議論の流れを可視化したことで、立場を超えた、フラットな雰囲気の中でディスカッションができた。
2. 私語が生じる背景・要因として、以下のようなキーワードおよびカテゴリを得た。
 - 1) 授業コンテンツの文脈にそった「私語」の背景・要因 = 共有への意欲
授業による触発や気づきを早く共有したいという意欲 / 共有することで連帯感や仲間意識を育みたい / 自分の意見を誰かに聞いてもらいたい
 - 2) 授業コンテンツとは無関係の「私語」 = 対話（ダイアログ）の不成立
 - ① 教員側の問題
教える熱意が不足している / 授業運営のスキルが未成熟である
 - ② 受講生側の問題
授業への興味・関心が薄い（→ 単位獲得という外発的動機付けで行動） / そばにいる仲間・友人とのコミュニケーションを授業に優先させる
 - 3) 「共有への意欲」をどう活かすか
質問につなげる / グループワークを通じて共有する / キーワードをパーキング・ロットなどに保存しておく

以上、全体として、今後の議論に向けて枠組みを提供する、以下のようなキーワードおよびカテゴリが得られた。

私語の二面性 【触発・気づきの共有 / モラルハザード・学習権の侵害】

私語の意味 【対話（ダイアログ）の不成立】

私語の背景 【教員におけるデザイン・スキル・意欲の問題、受講生における構え・動機付けの問題、教員・受講生双方における対話の不成立の問題】

第3部 まとめと共有

まず、第2部の各分科会より、実施した内容やそこで出された意見に関する報告を、1分科会につき5分の持ち時間で行った。報告にあたっては、分科会で実際に使用したファシリテーションツールや、分科会の様子を収めた写真を紹介し、現場の雰囲気を感じさせる工夫をした。なかでも「作業場」分科会では、ファシリテータだけでなく参加者もともに報告に参画した。すべての報告が終了した後、会場からの質疑応答を行った。

最後に、今回の報告会に準備段階から参画し、当日もさまざまな現場で活躍をした学生ファシリテータを参加者に紹介して閉会した。



2. 他部門との協力事業

(1) 学生部（寮務担当）

■ 現・新班長合同研修会

日 時 2月15日（火）9：00～12：00

場 所 本学12号館12403教室

概 要 現班長による、1年間の班長としての総括と、次年度の新班長による所信表明の場において、組織運営における「3つの力」についての講演。3月に行われる新班長対象の研修合宿の導入の意味ももつ。

内 容 ◎講演「組織を活かす3つの力」

メンバーの能力を引き出し、それをうまくまとめて、組織としてのひとつの力を発揮するために必要な能力として、「リーダーシップ」「マネジメント」「ファシリテーション」の3つがある。これらはそれぞれ独立した概念ではあるが、単独で活用されるだけでなく、場面によっては複数の能力が要求されることもある。たとえば「公平性」はこれら3つのすべてに必要とされる。



講演は参加者に対する「問いかけ」を多用した進行とした。

成 果 現班長に対しては、自分たちの活動をふりかえり整理する機会、新班長に対してはこれから班長として活動するにあたっての心構えの機会を提供できた。特に新班長は、3月の宿泊研修と連続性を持たせ、同じ内容を講義型・参加型の異なる方式で学ぶことで、より意識を高めることができた。また、3つの力を整理する過程を通じて、組織運営の原理原則を再考・整理する機会となった。

■ 平成 23 年度学生寮新班長合同宿泊研修会

日 時 3月14日（月）10：00～3月15日（火）12：00

場 所 京都産業大学 松の浦セミナーハウス

概 要 本学学生寮において次年度班長となる1年次生（25名）に対して、班長としての資質を高めるための研修合宿のうち、自己を分析し、組織運営力を強化するためのワークを担当した。寮班長のほか、寮務担当職員（4名）、教育スタッフ（3名）も参加。

内 容 ◎アイスブレイク3種

ペアを組んで共通点を探しあう「Common!! Everybody」、帰省先から大学までの所要時間順に並ぶ「ラインナップ」、グループメンバーでの共通点を探し自己開示と共感を促す「共通点グラントスラム!」を実施。



◎自己分析ワーク

「わたしの中のL (Leader)、M (Manager)、F (Facilitator)」をテーマに、ワークシートを使った個人ワークを行い、その後グループメンバーどうしで共有。



◎ケースワーク&クリエイティブワーク

寮班長として活動するなかで起こりそうな事例を取り扱った「ケースワーク」と、既存の枠にとらわれず寮生活がより充実するためのヒントになる「クリエイティブワーク」をそれぞれグループで実施し、模造紙にまとめ発表。

成 果 研修のうち、ファシリテーションに関連する部分のみを担当したが、チームビルディングを促すという点では研修全体により効果をもたらした。また、アイスブレイクでは教育スタッフもともに参加し、フラットな関係性づくりに寄与できた。

(2) 京都産業大学附属高等学校

■ 『『キャリア・デザイン』プレゼンテーション大会』 参観

日 時 1月28日(金) 13:35～15:20

場 所 京都産業大学附属高等学校 聚英ホール

内 容 附属高等学校KSUコース3年生のPBL型授業である「キャリア・デザイン」の総仕上げとなる最終報告・発表会にF工房より2名参加し、審査員を務めた。

成 果 当日発表した生徒に対し、昨年度「コンビニから見える世界」をテーマにワークショップを実施した。この授業で初めてファシリテーションによるグループワークを体験した附属高等学校生徒および教員の1年後の成長を知る機会となった。クラス代表の各チームの企画は、新奇性・創造性に富む内容となっており、昨年度の同大会よりさらにレベルアップしているように感じた。F工房が企画・運営した昨年度の高大連携授業の取組みを基礎とした3年生の成長を実感することができた。

■ グループワーク「附属高校がもし 100 人の村だったら」

日 時 1 月 31 日 (月) 13:20 ~ 15:10
 2 月 7 日 (月) 13:20 ~ 15:10
 2 月 14 日 (月) 13:20 ~ 15:10
 2 月 21 日 (月) 13:20 ~ 15:10

場 所 京都産業大学附属高等学校

概 要 大学の授業日程に合わせて実施されている「高大接続授業」の時間帯を利用して、4 回シリーズで開催するキャリア教育に関連するワークショップ。3 年生で開講される PBL 型の科目「キャリア・デザイン」への導入の意味合いももつ。池上彰氏の著作「日本がもし 100 人の村だったら」をモチーフに、自分たちが属するコミュニティである附属高校を 1 つの「村」に見立て、コミュニティの構成員の背景を調査し、結果をクラス内で発表。調査を通じたコミュニティに対する理解促進と、チームワークおよびメディア・リテラシーの向上を目的とする。グループワークの実施にあたっては、ファシリテータとして各クラスに教職員 1 名と学ファシ若干名を配置。

内 容 ◎第 1 回：全体オリエンテーション

まず、グループワークの目的とすすめ方、大学での学びとの関連性について説明。「日本がもし 100 人の村だったら」のダイジェスト版をスライドにて紹介した後、導入ワークとして、いくつかの調査を全員参加で実施。



◎第 2 回：グループワーク（調査項目選定）

クラスごとに分かれて、グループ分けとアイスブレイクを実施。その後、グループごとに調査項目を選定し、早くできたグループから調査を開始。

◎第 3 回：グループワーク（調査、発表資料作成）

第 2 回で選定した項目に基づき、グループごとに調査を実施。調査対象は附属高校全体とし、教室移動も可能とした。調査した内容は 1 項目につき A3 用紙 1 枚を使用して「紙芝居」形式で作成。

◎第 4 回：クラス内で発表

調査結果と考察したことを、1 グループ 5 分の持ち時間で発表。各グループの発表に対し、他の生徒は「よかった点」「工夫したほうがよい点」についてコメントを記入しフィードバックを行う。また、もっとも優れた発表をしたと思うグループに各自が投票し、ベストグループを選出した。

- 参加者 京都産業大学附属高等学校 KSU コース（文系）2年生 160名（5クラス運営）、
附属高等学校教員
- 成果 調査によって事実を明らかにする手法を用いたことで、今後多くの生徒が大学で学ぶ社会科学の意義を知ると同時に、調査自体の困難さや限界を体感する機会を提供できた。今回、スケジュール上の理由により、学年全体での共有の時間がとれず、コメントシートによるフィードバックも不十分なものに終わったのが残念である。



■ 平成22年度「ウォーミングアップ・セミナー」

- 協働者 本学連携推進室／本学附属高等学校
- 日時 3月9日（水）11：00～16：00
- 場所 本学5号館5303教室、1号館、5号館、12号館、14号館の各演習室とF工房、キャリア教育研究開発センター、および学内各部署の窓口



- 概要 本学附属高等学校から特別推薦枠で平成23年4月に入学予定の生徒約200名を対象に、進学への心構えと新たな人間関係構築のきっかけの場とすることを目的に実施。大学生活で出会う可能性のあるライフイベントを提示し、その中から興味のあるものを選択し、ファシリテータや学内各部署などの協力を得て解決方法を見つけていく「ディスカバー！KSU」を企画、運営した。当日は、F工房スタッフ5名と学生ファシリテータ9名が参画した。

- 内容 「ディスカバー！KSU」

●全体ガイダンス

ワークの趣旨および内容の説明と本日担当するファシリテータの自己紹介を行った。

●課題解決ワーク

各自がミッション（大学生活で出会う可能性のあるライフイベントを68

項目選んだもの)の中から好きな項目を選び、学内の各教室にブースを構えているファシリテータや学内各部署の学生窓口で相談しながら、解決方法をワークシートに記入。ファシリテータは生徒からの質問や相談に個人の知識と経験の範囲で対応した。



●ふりかえりとフォロー

ワークシートをもとに、大学生活に関して得た情報や新たに起こった疑問などを各自のふりかえりシートに記入した。また、大学生活で楽しみにしていること、不安に思っていることなどもふりかえりシートに記入し、最後に「なりたい京産大生のイメージ」を書くことで、本セミナーを大学生活へとつなげる形とした。



成 果 内部進学により、高校から大学への切り替えができてにくい生徒にとって、本セミナーはイニシエーション的な役割の一端とすることができた。同時に、ファシリテータと生徒とが個人と個人の間を軸にしながら対話できたことで、生徒の大学生活に対する不安や疑問が軽減される機会となった。

(3) その他

■ 「文化学部スターティング・セミナー 2010」

- 協働者 「文化学部スターティング・セミナー 2010」担当教職員および在学生ボランティア
- 日 時 4月3日(土)9:15~12:15
- 場 所 本学11号館各教室
- 概 要 文化学部の新入生全員(約220名)を対象とし、ネットワークづくりと文化学部の一員であるというアイデンティティを形成することを目的とした本セミナーにおいて、F工房は「プログラムデザイン」、「事前のファシリテータ研修」、「当日の運営サポート」についてかかわった。
- 内 容 ●「プログラムデザイン」
「文化学部スターティング・セミナー 2010」担当教員との事前打ち合わせに数回参加し、プログラムの骨組みをデザインするとともに、使用するアイスブレイクの選択を行った。

● 「事前のファシリテータ研修」(平成22年3月25日)

当日、ファシリテータとしてかかわる教員および在学生ボランティアに対して、事前にF工房で研修を行った。具体的には、当日の流れを確認した後、アイスブレイクで使用する「もじりんぐ」を参加者どうしで体験しながらその運営方法を習得した。



● 「当日の運営サポート」

当日は、F工房スタッフおよび学生ファシリテータも参画し、新入生約220名を7クラスに分けたうちの1クラスを担当し、クラス内の「アイスブレイク」と「新入生の期待と不安を共有するためのグループワークとフォーラム」の運営を行った。



成 果

F工房から提供したアイスブレイク「もじりんぐ」が、初対面どうしの交流促進に非常に有効であることが再確認された。同時に、F工房が事前のプログラムデザイン～ファシリテータ研修～当日の運営サポートまでの一連の流れにかかわれたことで、ファシリテーションをベースとした支援型セミナーとすることができた。その結果、本セミナーの目的が達成され、参加者(新入生)からの高い満足度を得ることができた。(アンケート結果より)



また、本セミナーにファシリテータとしてかかわった教員より、担当する初年次向け文化学部専門科目の初回授業において、他学部とは違うポジティブな雰囲気(受講生どうしが話し合い、教員にも積極的に話しかけてくる)がクラス内にあったとの評価を得ることができた。またこのような評価は、本セミナーには直接かかわっていない他の教員からも得ることができた。

■ 第1回「学生と教職員が共に考えるFDフォーラム」

協働者 本学教育支援研究開発センター
日 時 6月30日(水)13:00～14:30
場 所 本学5号館5301教室

- 概要** 本学の教職員と学生を対象に、本学における「FD (Faculty Development)」活動の活性化を目的として教育支援研究開発センターの主催で開催。第 1 回は「今、学生が求める授業とは!？」をテーマに、教職員と学生とが一緒に授業のあり方に関する意見交換を行った。
- 内容** 登壇者（教職員・学生）による事前打ち合わせに 2 回参加し、当日のパネルディスカッションに関する運営方法と、フロアからの意見が出やすくするためのアイスブレイクについて提案を行った。具体的には、フリップを使用しパネリストの意見をフロアに対して“見える化”する工夫と、ディスカッションのテーマに関して、参加者がペアとなりできるだけ多くの人と意見交換をする時間（アイスブレイク：Buzz）の導入を提案した。
- 成果** 「FD」というコンテンツには直接関与せず、本フォーラムのプログラムがデザインされるプロセスにのみアプローチできたことで、今後の他部署との協働におけるモデルケースとすることができた。また、カラーマーカーを使って、フリップに見やすい字を書くコツを登壇者に教示することができた。

3. 授業への参画

(1) キャリア形成支援科目

■ 「キャリア・Re-デザインI」

- 開講日** 春・秋学期開講。水曜日（不定期）13:15～16:30（3,4 限）と合宿（1泊2日）を実施。
- 授業趣旨** モチベーションの低下により、大学から職業世界への移行に関して困難を抱える学生を主な対象とした科目。【自己開示】～【自己概念の確立】～【社会への目線づくり】～【キャリア意識の再構築】というプロセスをたどることで、受講生のモチベーション再発見とキャリア形成を支援する。
- 概要** 約 100 名の受講生を春学期は 5 クラス、秋学期は 6 クラスに分け運営。授業担当のファシリテータとして F 工房スタッフがかかわったほか、授業全体のプログラム・デザインに参画した。各クラスの運営方法は担当ファシリテータの裁量により決定しているが、アイスブレイクやファシリテーションツールなどの提供は随時行った。
- 成果** F 工房設立のきっかけとなった同授業において、キャリア教育におけるファシリテーションの有効性が再確認された。今後、この授業で得られた知見やノ

ウハウウ等を発信することをきっかけに、ファシリテータマインド普及の気運がさらに高まることが期待される。

■ 「自己発見と大学生活」

協働者 松高政（経営学部准教授）

日 時 4月22日（木）4限

場 所 本学大教室棟514教室

概 要 1年次生を対象に、大学生活とその後の社会や仕事、働くことについて、グループワーク等を通じて受講生どうし、担当教員と一緒に考えることを目的とした授業。F工房は2回目の授業において、友達づくりを念頭におきながら、以後毎回の授業で行われるグループワークの練習も兼ねて、80分の運営時間で約210名を対象にアイスブレイクを実施した。なお、当日は学生ファシリテータ3名も参加して運営のサポートを行った。



内 容 「Feel in G（フィーリング）」（学生ファシリテータ開発オリジナルゲーム）実施

6名1グループとなり、3対3の対戦方式にて実施。メンバーの生き立ちや趣味嗜好に関して、それを見た目だけで判断し当てていくというもの。他者を見た目だけで判断することの難しさとおもしろさを体験することが目的。



成 果 ネットワークがづくりづらい大教室の授業において、受講生を少人数のグループに分け、時間をかけてアイスブレイクを行うことで、「友達づくりの場」を創出することができた。また、1年次生の春に開講する同授業における「友達づくり」のニーズが高いこともアンケート結果から明らかとなった。一方で、200名を超える受講生を少人数のグループに効率よく分ける方法に関する課題が残った。

■ 「O/OCF-PBL1*」合宿授業

*On/Off Campus Fusion-Project Based Learning の略称。

日 時 10月2日（土）12時30分～22時00分

場 所 奥琵琶湖マキノパークホテル&セミナーハウス

授業趣旨 企業等から提供された課題に取り組みながら社会人基礎力を育成していくためのコーオプ教育として展開される授業の第1ステップ。1年次から3年次まで3年間一貫して実施されるうちの1年次生対象授業。

概 要 全体のアイスブレイクとチームビルディングを目的とした合宿において、F工房はFA（ファシリテーション・アシスタント：元受講生の学生ボランティア）と協働して、全体でのアイスブレイクと夜間実施の交流プログラムを企画、運営した。

内 容 ●アイスブレイク

合宿授業の初めのワークショップとして、受講生（約100名）と教員、FAを交えた全体でのアイスブレイクを実施した。具体的には、約100名で1つの円になったの「サークルコレクション」と、その後のグループワークにつなげるためのグループ分けを行った。



●交流プログラム

受講生どうしがグループやクラスを超えて交流することを目的に、以下のワークを実施した。なお、交流プログラムに関しては、事前にFAと2回にわたってプログラムデザインのための打ち合わせを行い、当日はFAがメインで運営を行った。

【パズル de グループ】

6または7枚で1つの写真となるピースを各自に渡し、同じ写真になる人たちでグループを組むゲーム。

【じえすちゃ〜げ〜む】

与えられるお題についてジェスチャーのみで解答者に伝え、解答者はそれを答えるゲーム。1問正解すれば解答者を入れ替え、時間内の正解数をグループごとで競う。



成 果 長きにわたる授業の最初に全体でアイスブレイクを行うことで、今後につながる親和的雰囲気が構築できた。またFAがプログラムをデザインし運営する一連の流れをサポートすることで、ファシリテータマインドの普及に寄与できた。今後、同授業において更なる協働が行われることが期待される。

■ 「大学生生活と進路選択」

協働者 松高政（経営学部准教授）

日時 10月7日（木）4限

場所 本学12号館12403教室



概要 2年次生を対象とし、自分自身と将来を考え、見えてきた課題やテーマを自らの問題として取り組むための「訓練の場」とするための授業。F工房は同授業の2回目において、クラス内のアイスブレイクとグループワークの体験を目的としながら、80分の運営時間で受講生約50名を対象にワークショップを実施した。事前に学生ファシリテータと打ち合わせを行い、プログラムをデザインした上で、当日は授業全般を通して学生ファシリテータ3名が運営を担当した。

内容 1. 「Common!! Everybody」

固定机もうまく活用しながら、教室内を自由に動いてペアを組んだ。

2. 「バースデーライン」

教室全体を使って、参加者全員が誕生日順に並ぶようにする。ただし、ゲーム中はしゃべらずに行う。その後、列の端から順に番号をふっていき、3名1グループを編成した。

3. 「プレスト大会」

グループで時間内にテーマにそった答えを思いっただけ出していくゲーム。テーマは「『か』と読む漢字」と「『Love』の新しい日本語訳を考えよう」とした。

成果 50名ほどの受講生間での十分なアイスブレイクができた。また、グループでのブレインストーミングを通して、グループダイナミクスを体験する機会となった。さらに、学生ファシリテータが企画から当日の運営に至るまでを一手に担い実施したことで、よりピアな形でのワークショップを実施することができた。



(2) ゼミ

■ 「法学部演習」(法社会学)

担当者 久保秀雄 (法学部助教)

日 時 平成 22 年 4 月 20 日 (火)、10 月 5 日 (火)、10 月 19 日 (火) 1 限

場 所 本学 4 号館 4F 演習室

概 要 裁判外紛争処理 (ADR) を扱うゼミでの運営支援。春学期にはゼミ生どうしの交流を深めるためのアイスブレイク的なワーク、秋学期は模擬調停の運営を通じてそれぞれの修学状況を鑑みた「聴く力、話す力」の向上を図る。受講者は 2 年次生、3 年次生合計 25 人。

内 容 ◎フォトランゲージ (4 月 20 日)

グループの 1 人が写真を見て、他のメンバーに口頭で伝えることでその写真を模写する「伝言スケッチ」、一続きの写真をグループ全員で見て、そこに自由にストーリーを創作する「4 コマストーリー」の 2 種を実施。



◎模擬調停 (10 月 5 日、10 月 19 日)

ゼミ生にとって身近な問題である「アパートでの迷惑行動」を用いた紛争事例を作成し、当事者と調停人を選出、残りのゼミ生は傍聴人役をつとめる模擬調停を実施。傍聴人役にはいずれか一方の当事者の言い分のみを知っている人、どちらの言い分も知らない人、どちらの言い分も知っている人に分け、ロールプレイ後にフィードバックと意見交換を行った。10 月 5 日の実施後、教員および学生からのフィードバックを得て、クラス全体でなく小グループに分かれ、それぞれでロールプレイを実施することにより、調停の当事者を増やした。



成 果 裁判外紛争処理は、当事者どうしの合意を促し問題を解決するという点において、きわめてファシリタティブな活動である。その点においては、F 工房による教育支援がなじみやすい分野であり、ゼミ支援のひとつのモデルケースとすることができた。また、ゼミ開講後の早い時期にメンバー間の交流を促すワークを導入することで、ゼミ内に親和的な雰囲気が生まれ、その後の

運営にも好影響を及ぼすことが示唆された。支援を実施した授業の前後では、教員および学生によるフィードバックを丹念に実施したが、その中で学生からはかなりシビアな評価も得た。これは一見すると、不適切なプログラムの提供のように見えるが、学生の忌憚のない意見を聞くことができる機会であり、学生／教員／F工房スタッフの心理的な障壁が取り除かれていることの証左ということもできる。PDCAサイクルが機能した、F工房として参考にすべき点が多い活動であった。

■ 「法学部演習」(国際法)

協働者 岩本誠吾 (法学部教授)

日 時 4月7日(水)2限

場 所 本学4号館4E演習室

概 要 3年次生と2年次生が対象の演習授業。その初回授業の45分間を使用して、受講生22名と教員1名が交流するためのアイスブレイクを実施した。

内 容 1. 「サークルコレクション」

参加者は3年次生と2年次生とが混在していること、そして担当教員も加わっていることを考慮しながら実施した。



2. 「フリップ自己紹介」

フリップに【名前、ニックネーム、自己PR、国際法・ゼミへの想い】を記入し、全体の前で1人30秒の持ち時間にて自己紹介を行った。

成 果 ゼミの初回授業という初対面の人たちが多く集まる場において、その緊張をほぐし、どのような人たちがこのゼミに集まっているのかを知る機会をつくれたことで、今後の活発なゼミ活動の第一歩とすることができた。

■ 「文化学部基礎演習」(文化学部専門科目)

協働者 鬼塚哲郎 (文化学部教授)

日 時 4月19日(月)3限

場 所 本学11号館11309教室

概 要 文化学部2年次生対象の演習授業。その2回目の授業を80分間使用して、受講生18名と教員1名を対象に、お互いの顔と名前を一致させるためのアイス

ブレイクを実施した。

- 内 容
1. 「サークルコレクション」
参加者全員が2年次生であることを心がけながら実施。ワーク中、参加者の中に何組かの仲良しグループが存在していたようだったので、その点も配慮しながら運営した。
 2. 「Common!! Everybody」
机と椅子とが一体になっている教室であったので、それをうまく活用するように促しながら実施した。
 3. 「覚えて呼んで答えてあげて」(名前覚えゲーム)
円になり、起点になる人から順に自分が呼んで欲しい名前を言っていくが、自分の番になった時は、起点になる人から自分まで間にいる人の名前を全員呼ぶことで、その場にいる人の名前を覚えるゲーム。



成 果 ゼミの2回目の授業において、未だ残るかたい雰囲気をはぐすことができたと同時に、新たなネットワーク構築のための基礎をつくることができた。

■ 「アメリカ文化演習Ⅱ」(文化学部専門科目)

- 協働者 小倉恵実 (文化学部助教)
- 日 時 10月7日(木)4限
- 場 所 本学11号館11407教室
- 概 要 文化学部の4年次生を対象とした「アメリカ文化演習Ⅱ」の授業時間内に、同受講生が3年次生対象の「アメリカ文化演習Ⅰ(同教員担当)」の受講生と交流することを目的に、60分を使用して、両受講生約20名を対象にアイスブレイクを実施した。
- 内 容
1. 「サークルコレクション」
4年次生と3年次生とで別のネットワークができていることと、教員を中心にしながら両者をつなげることを意識して運営した。
 2. 「Common!! Everybody」
できるだけ知らない人とペアになるよう促した。
 3. 「覚えて呼んで答えてあげて」(名前覚えゲーム)

円になり、起点になる人から順に自分が呼んで欲しい名前を言っていくが、自分の番になった時は、起点になる人から自分まで間にいる人の名前を全員呼ぶことで、その場にいる人の名前を覚えるゲーム。

成 果 今までかわりのなかった同演習の4年次生と3年次生の交流が促進され、縦の関係づくりと今後の活発なゼミ活動に寄与することができた。

(3) その他科目等

■ 法学部「プレップセミナー」(岩本)



協働者 岩本誠吾 (法学部教授)

日 時 4月8日(木)2限

場 所 本学4号館4E演習室

概 要 法学部の初年次演習として開講されている同授業において、約60分を使用し受講生29名と教員1名とが互いに交流するためのアイスブレイクを実施した。

内 容 1. 「サークルコレクション」

全員が1年次生であることと、この回が1回目の授業であること、つまり全くの初対面どうしであることを配慮して運営を行った。

2. 「Common!! Everybody」

時間内にできるだけ多くの人とペアになるよう促した。

成 果 1年次生の少人数クラスで開講されている同授業の初回で、今後の授業および大学生活につながるネットワーク構築の場とすることができた。

■ 法学部「プレップセミナー」(高島)

協働者 高島淳子 (法学部准教授)

日 時 4月13日(火)3限

場 所 本学4号館4A演習室

概要 法学部の初年次演習として開講されている同授業において、約 60 分を使用し受講生 25 名と教員 1 名とが交流を深めるためのアイスブレイクを実施した。なお、当日は学生ファシリテータ 2 名も参加し運営をサポートした。

内容 1. 「サークルコレクション」
学生ファシリテータ 1 名が運営を担当した。事前に運営方法について打ち合わせを行い、運営する学生ファシリテータの個性を活かせるような形にカスタマイズした上で実施した。



2. 「Common!! Everybody」
見学に来られていた他の教員 1 名や学生ファシリテータ、F 工房スタッフもすべて参加した。

成果 1 年次生の少人数で開講されている同授業の最初に、今後の授業および大学生活につながるネットワーク構築の場とすることができた。また、学生ファシリテータが運営を担当し実践経験を積むことができたと同時に、よりピアなアプローチからのアイスブレイクとなった。

■ 「マネジメント特講 (キャリア開発 A)」 (経営学部専門科目)

協働者 松高政 (経営学部准教授)

日時 4 月 22 日 (木) 1 限

場所 本学 5 号館 5301 教室

概要 教員の依頼により「授業内での新たなネットワークの構築」と「自分たちを少し客観的に見ることをテーマとしたワークショップをデザインした。当日は、75 分間を使用して、受講生約 90 名を対象にワークショップを実施した。なお、当日は学生ファシリテータ 1 名も参加した。



内容 「壺、2、Ⅲ、Four」
テーマを「自分たちと自然現象」とし、【個人ワーク～ペアワーク～3 人でのグループワーク～4 人でのグループワーク】と順に人数を増やしていき、それぞれ【自分～ペア相手～グループ 3 人～今の大学生】を「自然現象に例えると何か」について考えるワークを実施した。



成 果 約90名の受講生が、様々な形態のワークを通して自分たちのことを一歩引いて捉える契機となった。一方で、既に構築されているネットワークが強固であったため、ワーク内で既存のネットワークを超えて様々な人とかかわることへの促しの難しさが課題として明確になった。

■ 「コミュニケーション理論」(文化学部専門科目)

協働者 大河内泰樹 (文化学部非常勤講師)

日 時 5月25日(火)2限
11月30日(火)1限

場 所 本学2号館208教室

概 要 認識したものを我々は言語としてどのように表現するのかというプロセスを考えることを目的に、同教員によって開発された《言語ゲーム》ゲーム「ほげげ語ゲーム」について、そのコンテンツの提案と授業のプログラムデザインおよび当日の運営サポートを行った。春学期、秋学期ともに同様の形でかわった。当日の受講生数および参加スタッフは以下の通り。

《春学期》受講生54名

F工房スタッフ1名、学生ファシリテータ2名

《秋学期》受講生21名

F工房スタッフ1名、F工房実践研修生1名、学生ファシリテータ1名

内 容 【コンテンツへのかかわりについて】

昨年度の経験を活かして、ゲームの内容に関する提案を行った。具体的には、ゲームで使用する「ほげげ語」の必要語彙を教員とともに検討し、それを増やした。



【プログラムデザインについて】

昨年度の授業の反省を踏まえ、ゲーム実施前に少人数単位でのアイスブレイクを下記の通り実施し、親和的雰囲気の中でゲームに臨むプログラムとした。

《春学期》ペアでインタビューを行い、相手のキャッチコピーを考えるゲームを実施

《秋学期》1分間、相手を見つめ続けながら似顔絵を描くゲームを実施。

【当日運営サポートについて】

当日は、F 工房スタッフがゲームの趣旨説明、グループ分け、アイスブレイクまでを担当し、ゲーム中はその全般において、F 工房スタッフと学生ファシリテータが各グループを巡回し、ほぼ初めて言葉を交わす学生間の話し合いを促進させるためファシリテートを行った。



成 果 本ゲームを通して、場のデザインの重要性やファシリテータとしてのかわり方の難しさと有用性が改めて確認できた。また、コミュニケーションについて学問的にアプローチする同授業および同ゲームは、ファシリテーションと通底することもあり、プログラムのデザインやプロセス支援にとどまらず、ゲームのコンテンツを企画・検討する段階から教員と協働できた。一方、ここで得た知見やノウハウ等を今後どう活かすかが課題となった。

■ 法学部「プレップセミナー」(久保)

協働者 久保秀雄 (法学部助教)

日 時 5月31日(月)2限
6月7日(月)2限

場 所 本学4号館4F演習室

概 要 法学部の初年次演習として開講されている同授業において、グループでの協働を通してチームビルディングやグループの中での自分の役割を認識するためのワークを2回にわたって実施した。なお、当日のプログラムは事前に担当教員と打ち合わせを行いデザインした。



内 容 ●1回目(5月31日)

コンセンサスゲーム「捨てられない自由」を実施。

9つの自由に関する項目について個人で順位づけした後、それをグループ内で共有し、みんなが納得できる形の順位をグループごとに決定するワーク。多様な価値観に触れると同時に、いかにしてみんなの意見をすり合わせるのかがポイントとなる。



●2回目（6月7日）

情報共有ゲームを実施。

グループメンバー各自が持つ断片的な情報を、グループ内で共有しながら時間内に1枚の地図を完成させるワーク。メンバー全員が自分の情報を口頭でしか伝えられないルールのため、いかにして出された情報をまとめるのかがポイントとなる。またワーク後にはふりかえりを行い、それぞれがワーク中に果たした役割について話し合った。



成 果 グループでの協働を通して、合意形成までのプロセスやグループの中で自分が果たす役割について、体験的に学ぶ機会となった。また、担当教員がファシリテータとして個人の行動やグループの取組みのプロセスを観察し、ふりかえりの場でその様子をフィードバックしたことにより、教員がファシリテータとして振舞うことの可能性と意義が明確となった。

■ 「米文化概論I」（文化学部専門科目）

協働者 小倉恵実（文化学部助教）

日 時 7月16日（金）3限

場 所 本学11号館11304教室

内 容 同授業において実施される「文化学部特別講演」に関して、その運営方法の提案を行った。具体的には、事前に同授業受講生の中から、当日運営スタッフとしてかかわる学生のリクルートを提案した。そして、その学生と担当教員、F工房スタッフの3者で事前にミーティングを行い、当日の運営方法とフロアからの意見集約の方法を決定し、当日はその運営をサポートした。

成 果 学生、教員、F工房スタッフがフラットな関係を背景としながら、プロジェクトスタッフとしてプログラムをデザインする段階から協働することができた。

4. 学生活動の支援

(1) 道具箱活動



概要 F工房の「道具箱活動」は学生を主体としたF工房での諸活動のことを指すが、おおよそ以下の3種類に大別できる。

1. ファシリテーションツールの開発およびカスタマイズ
 2. 「ファシリテーション」をキーワードとした企画立案やディスカッション
 3. F工房外の学生活動団体がミーティング時にF工房を活用すること
- 今年度は以上の3つについての活動が展開された。詳細は以下の通り。

- 内容**
1. ファシリテーションツールの開発およびカスタマイズ
 授業や研修等でアイスブレイクやワークショップを実施する際に、その開発およびクライアントに応じたカスタマイズを行った。また実際の授業や研修等でその運営も担った。作業は基本的にF工房内で行われ、学生ファシリテータとF工房スタッフが協働で行った。この活動は、基本的に教職員からの依頼により始動する。そのため授業や研修、イベントごとに組織されるアドホックな集まりであり、年間を通して随時実施された。
 2. 「ファシリテーション」をキーワードとしたイベントの企画やディスカッション
 学生ファシリテータがF工房にて「ファシリテーション」をキーワードとしたイベントを企画したり、ファシリテータマインド醸成のためのディスカッションを行ったりする活動のことで、定期的集まる機会が設けられた。学生を主体としたサークル活動的な集まりといえよいか。
 「人前で話そう ～パブリック・スピーキングへの誘い～」(p.12 参照)の企画がその代表で、この企画に際し、平成 22 年 6 月 7 日 (月)、14 日 (月)、16 日 (水)、18 日 (金) の計 4 回にわたってミーティングの場が持たれた。
 3. F工房外の学生活動団体がミーティング時にF工房を活用すること
 F工房外で行われている学生活動に関して、そのミーティングや話し合いの際にF工房を活用することで、その話し合いを様々なアプローチからファシリテートした。具体的には、F工房にある各ミーティングスペース

やファシリテーションのツールなどを貸し出すことで、話し合いの場を支援した。

成果 学生どうし、学生とF工房スタッフもしくは教職員が協働するプロセスにおいて、ファシリテータマインドの醸成に大きく寄与できた。F工房の活動において、学生の存在が欠かせないものとなったのも、この「道具箱活動」を核とする学生のファシリテーション関連活動によるところが大きい。今後も、更なる発展が見込まれると同時に、F工房外にもこのような動きが広がることが期待される。

(2) 「学生寮サマーセミナー」実行委員会

協働者 学生寮合同サマーセミナー実行委員（平成22年度学生寮班長有志）

日時 6月15日（火）、22日（火）、7月1日（木）、6日（火）、8日（木）、13日（火）、15日（木）、20日（火）、29日（木）、30日（金）

場所 F工房「道具箱」

内容 学生寮のイベントである「サマーセミナー（8月3、4日実施）」について、その実行委員がミーティングを行う場所としてF工房を提供した。また、F工房スタッフがそのミーティングに適宜参加をし、「アイスブレイク」や「寮生活について語るグループワーク」の運営方法についての相談に応じた。

成果 F工房は、「サマーセミナー」当日には参加しなかったものの、実行委員がアイスブレイクの選択からカスタマイズ、グループワークのプログラムデザインからその準備に至るまでのプロセスを支援できた。「サマーセミナー」のコンテンツには深くかかわらず、彼らがアドバイスを求めてくる事項についてのみ対応するという、学生団体とF工房との新たな協働の形が見える機会になった。課題として、セミナー後に実行委員とF工房とでふりかえりの場を設けられなかったことが挙げられる。



(3) 「O/OCF3* 合宿」実行委員会

*On/Off Campus Fusion 3

- 協働者 「O/OCF3 合宿」実行委員
- 日時 5月20日(木)、27日(木)、6月3日(木)
- 場所 F 工房「道具箱」
- 内容 本学のキャリア形成支援科目である「O/OCF3」の合宿(6月12、13日実施)にあたり、その受講生有志で結成された実行委員スタッフがミーティングを行う場を提供した。また、ミーティング時にはF工房スタッフがファシリテーショングラフィック担当として参加し、話し合われる内容を可視化しながら議論の促進に努めた。
- 成果 F 工房スタッフは議論のコンテンツには直接関与せず、ファシリテーショングラフィックを担当することで、ファシリテーションを用いた話し合いの場を提供することができた。

5. 他部門・学外への協力

(1) 第5回京都FDer塾「授業活性化へのヒント～ファシリテーションとは～」

- 協力依頼者 京都FD 開発推進センター FDer 養成ワーキンググループ
- 日時 6月28日(月) 18:00～20:00
- 場所 池坊短期大学 洗心館6階 第1会議室
- 概要 平成20年度文部科学省「戦略的大学連携支援事業」の一環として開催されているFDer塾において、ファシリテーションの導入による議論の活性化を体験するためのワークショップを開催。
- 内容 ◎話題提供「京都産業大学F工房沿革」
F工房が設立された経緯や、これまでの活動内容、課題について報告。
◎ワークショップ「実際の授業を題材にした支援案作成のワークショップ」
事前募集により提示された「授業運営において改善したい点」をもとに、参加者が意見交換を行い、問題点と具体的改善策を提案する。
- 参加者 12名
- 成果 実際に使用しているシラバスを用いてのワークショップであり、リアリティをもってワークに臨めた。一方、参加者の中には一方的に話す人やワークの

趣旨から外れた行動をする人もおり、どのようなときにファシリテーションが危機的状況に陥るか、身をもって知ることができた。

(2) 京都市立洛風中学校3年生への大学模擬授業体験

- 日 時 7月5日(月) 13:10～14:00
- 場 所 本学1号館115教室
- 概 要 京都市立洛風中学校3年生25名および教職員9名を対象に実施。大学での講義を体験することで、進路設計の参考とし、将来への夢を持ち学習の励みにつなげることを目的に、大学の教職員と学生に直接話を聞いてみるワークを実施した。当日はF工房スタッフ2名と学生ファシリテータ1名が運営とワークのスピーカーを担当した。
- 内 容
1. 導入
大学の学びのスタイルを紹介する。生徒に大学の印象を尋ねる。
 2. グループ分け
バースデーライン(誰ともしゃべらずに誕生日順に並ぶ)で3グループに分ける。
 3. スピーチ「〇〇さんの話を聴こう」
グループに1名のスピーカーがつき、フリップに提示するトピックの中から、生徒が聴きたい話を選び、スピーカーがそれについての話をするワーク。スピーカーは自身のライフヒストリーを中心に生徒とのやり取りも混ぜながら話をした。
 4. ふりかえり
グループワークの全体共有を計画するが、時間切れで実施できず。
- 成 果 生徒は、授業に先立ち午前中に大学見学に参加しており、模擬授業で出会った教員、職員、学生を通じ大学を身近なものに感じてもらうことができた。

6. 研究会等への参加

(1) 学生支援 GP シンポジウム「ピア・サポートの継続性と可能性」

- 主 催 法政大学・関西大学
- 日 時 10月2日(土) 13:00～17:00
- 場 所 法政大学 市ヶ谷キャンパス外濠校舎3F・S305教室
- 内 容 第1部 事例報告
事例報告として、関西大学からは「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ」、法政大学からは「『学生の力』を活かした学生支援体制の構築」があった。関西大学では、ピア・コミュニティ全体のコーディネート「運営本部」が行っており、一人暮らしの学生に対するサポートプログラム等を行っていた。法政大学では、参加学生が年度ごとに新たなプログラムを立ち上げ、運営していく KYOPRO（キョープロ）というシステムを採用していた。
- 第2部 パネルディスカッション
各大学から教員・職員・学生それぞれ1名ずつが登壇し、現状と課題についての報告と意見交換があった。
- 成 果 関西大学での取組みについて、正課科目「関西大学におけるピア・サポートを考える」が、1年次生に向けて開講されており、ピア・サポートの理念が授業を通じて学生に浸透していく回路が既に開かれている点が注目された。両大学とも同じ学生支援事業の枠内ではあるが、支援の内容にあたる「ピア・サポート」を事業化しており、支援のツールにあたる「ファシリテーション」を事業化した本学との違いについて興味深い考察を得た。

(2) 名城大学第12回FDフォーラム

- 主 催 名城大学FD委員会・大学教育開発センター
- 日 時 12月2日(木) 14:00～18:00
- 場 所 名城大学天白キャンパス共通講義棟北1階 N101 講義室（名城ホール）
- 内 容 「学生の学習意欲を高める授業とは」と題した、高校の「現代社会」の授業の実践等を通じた基調講演、および名城大学の教員による授業実践による報告や問題提起。
- 成 果 名城大学は大学規模や学生気質など、本学と共通する点が多く、具体的な授業実践報告は非常に共感でき、今後の情報共有の重要性を感じられた。

(3) 第8回高大連携教育フォーラム

- 主催 京都高大連携研究協議会
- 日時 12月3日(金) 9:30～15:30
- 場所 キャンパスプラザ京都 基調報告(4階第2講義室) 分科会(2階ホール)
- 内容 第1部
まず、「日本型高大接続の転換点」と題した基調報告があった。制度的危機を迎えている「日本型高大接続」に対応するための「高大接続テスト(仮称)」の概要説明。これは目標標準型の達成度テストで、「普通教育の完成」をめざすものである。その後、「新しい時代に求められる能力をどう育成するか～高大接続テストの持つ意味～」をテーマに、高校・大学・企業からパネリストによる報告および意見交換が行われた。
- 第2部
(分科会A(キャリア)生徒・学生の成長の契機とキャリア教育のありかた)
単位制、生徒の速度別授業の導入をし、高校3年間に総合的な学習時間を取り入れ、内発的な進路意識の醸成を図っている高校からの報告。生徒の成長、一定の教育効果はみられるものの、調べ学習の域を脱していない点、質を維持するためにどのような教育活動を続けていくかが課題であると報告された。
- 成果 「高大接続テスト(仮称)」の課題については、高校、大学、企業それぞれの立場から、見えてくる問題・課題があり、その問題・課題をそれぞれの現場で議論するのではなく、三者が一同に会し、議論し、「高大接続テスト(仮称)」の導入、その持つ意味が、現場に理解、浸透していくためには、高大関係者の協力と教育改革の継続の必要性があると感じた。

(4) 関西大学 FD フォーラム「これからの大学教育を考える」

- 主催 関西大学
- 日時 12月18日(土) 13:00～16:30
- 場所 関西大学千里山キャンパス 第三学舎 ソシオ AV 大ホール
- 概要 1. 座談会「これからの大学教育を考える」
全国大学生調査による平成生まれの学生たちの特徴(真面目で自己評価を謙遜的に行う傾向、自分のことを「生徒」と呼ぶ、SNSの利用など、大人世代と異なった柔軟性、柔軟なジェンダー観)を踏まえた対応策に関する意見交換があった。大規模私立大学での対応策としては、多様な人たちと知り合うことで批判的思考を涵養する、インフラは理事会ベースで整備する、大学の

ミッションや機能別分化を考慮に入れる、専門知識重視の傾向がある学生に対して教養教育や社会人基礎力をバランスよく提供する、の4点が重要であるとの意見が出された。

2. パネルディスカッション「チェック！関西大学でのピア・サポート活動」
 大学教育のモデルは主に「知の再生産」にあるが、ピア・サポートの作業は「関係をクリエイトする営み」であり、独自の意義を持つとの指摘があった後、今後の展開として、授業の形でピア・サポートを残していくことを、かかわった学生自身が選択したことが報告された。

成 果 学生支援の一環としてのイメージが強い「ピア・サポート」を普遍的な理念として捉え、開講科目を通して普及していく方法に重要な示唆を得た。

(5) 平成 22 年度大学教育改革プログラム合同フォーラム

主 催 文部科学省・合同フォーラム推進事務局

日 時 1月24日(月) 10:30～17:00
 1月25日(火) 10:30～17:00

場 所 秋葉原ダイビル2階コンベンションホール 他周辺会場

内 容 本フォーラムにおいては基調講演、分科会およびポスター展示に参加した。ポスター展示においては、本事業と同様の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に選定された大学等(7大学、1高専)と、互いの事業を紹介しながら、本音を交えた中身の濃い意見交換を行った。

成 果 本フォーラムでは GP 事業取組み大学等の報告および個別の意見交換を通して、今後 F 工房を運営し、ファシリテーションを大学に普及していく上で非常に参考となる事例に多く触れられる機会となった。数校の大学とは、今後も継続的に情報交換を行うことが期待される。

(6) 聖泉大学学生支援 GP 中間報告会「キャリア教育サミット in 滋賀」

主 催 聖泉大学

日 時 3月12日(土) 13:00～17:30

場 所 ひこね市文化プラザエコーホール

内 容 近江商人の「三方よし」精神を大学での社会貢献に反映させる意義についての基調講演、キャリア教育の新たな展開についての報告の後、同大学の学生支援 GP 「NPO・地元企業と連携した地域力循環型キャリア教育プログラム」

である「CLC (Carrer learning in Local-power Circulation)」の事業説明および実践報告があった。本事業では、市民活動→イベント(学びのフリーマーケット)の開催→地域の経済団体や企業との連携と段階を踏んで、人財育成と地域の活性化を有機的に行っている。またイベントでは地域住民に大学を開放し、大学自体による地域貢献も実践している。

その後参考事例として、大学、高校、教育NPO、企業より実践報告があった。すべての報告が終了したあと、会場からの質問を集約してそれらに答える形で全報告者を交えたパネルディスカッションが行われた。

成 果 学生の多くが地元出身で、かつ地元で就職するという同大学の特性を最大限に活かした取組みであることがよく理解できた。地域の企業と協働することで、リアルな職業世界に触れることができ、早期離職などのミスマッチを未然に防ぐことが期待できる。産・学・官・民の個々の特性を引き出し大きな力を生み出すコーディネートの必要性は、本学でも参考にすべき点である。

7. 人材育成

(1) 「ファシリテーション OJT」科目等履修生(京都未来を担う人づくりサポートセンター)

- 趣 旨** 京都府内の企業に就職を希望する若年求職者を対象として人材育成を行う「京都未来を担う人づくりサポートセンター」における「大学の人財養成講座」の一環として、本学では「就業力強化 OJT プログラム」を開講、14 名の「担い手」を受け入れた。F 工房では副専攻科目である「ファシリテーション OJT」を担当し、キャリア形成支援科目における学生支援を通じて人材育成を行った。
- 時 期** 9 月 27 日（月）～ 2 月 21 日（月）
- 内 容** 「キャリア・Re-デザイン I」（4 名）と「キャリア・デザイン応用」（10 名）に分かれて、それぞれ授業でのファシリテーションを実践した。
- 成 果** ファシリテータとしての経験を通じて、履修生のコミュニケーション力の強化に寄与できた。また、履修生は学生と年齢が近いことから、学生に対してもひとつのロールモデルとしての存在意義も見出された。

(2) (財) 地域公共人材開発機構実践研修生受け入れ

- 趣 旨** 地域公共人材開発機構が実施している、公共的要素に対応可能な人材の育成のための教育・研修システム構築への協力として、同機構に所属する職員を 1 名実践研修生として受け入れ、教育現場でのファシリテーションをともに実践した。
- 時 期** 10 月 12 日（火）～ 2 月 26 日（土）までの期間、週 1 回 8 時間
- 内 容** F 工房事業において、ファシリテータとして企画立案、事業運営および補助に参画。
- 成 果** 産学官民のセクターを越えた協働のために不可欠なスキルであるファシリテーションを現場で体験する機会を提供できた。

小括 ー平成22年度活動をふりかえってー

学生支援GPとしてのF工場の活動も、はや折り返し点を過ぎた。2年目となる今年度はいくつかの成果とともに、問題点も見えてきた。ここでは、主な成果と問題点を明らかにし、次年度に向けての課題としたい。

[成果]

1. ファシリテーション実践の蓄積

授業その他の学生支援活動において、ファシリテーションを多くの場で実践することができた。アイスブレイクやファシリテーショングラフィック等のスキル向上につながっただけでなく、それぞれの現場にふさわしいプログラムデザインを考案できるための知見を数多く得た。また事前事後の意識共有の機会を重視することで、PDCA サイクルに沿った課題解決が定着した。

2. 学生ファシリテータ（学ファシ）の充実

F工場開設当初の学ファシは、「キャリア・Re-デザインI」でファシリテータをつとめる学生が主な構成員であった。ファシリテータとしての経験も積み、即戦力となるメリットはあったが、F工場の事業全般にかかわることに対する意識はまちまちであった。

今年度は、F工場の事業趣旨に賛同し、活動を希望する学生が中心となったことで、F工場へのコミットメントが格段に強くなった。たとえば、「戦略会議」や「知恵袋」活動は基本的に学ファシにも参加の門戸を開いているが、議論には真摯な態度で参加し、ファシリテーショングラフィック等、重要な役割を担うことも少なくない。ファシリテーションの基本コンセプトである「フラットな関係性」は、学ファシの参画があつてこそのものであると実感している。

3. 授業支援のためのプログラムデザインの構築

さまざまな授業の現場で支援活動をしてきたが、数回にわたって授業に参画した「法学部演習」(P.43参照)では、ファシリテーションのコンセプト共有から具体的なプログラムデザイン、実施後の評価や改善といったあらゆる過程において、当事者である教員や学生の積極的関与があり、教員のめざす方向性の実現に寄与することができた点で大きな成果を得たといえる。特に、学生からの歯に衣を着せない意見は、F工場にとって貴重なものであった。結果、学生のニーズを汲んだプログラム修正案を提示することができ、授業の満足度が高まっただけでなく、ゼミ自体の雰囲気も活発化し、学生が学びに対して貪欲な姿勢をとるようになったという報告を聞くことができた。この事案から授業支援のモジュールを作成し、さらに練ってゆきたい。

4. 学内外とのネットワーク構築

学内では、新たに設立された教育支援研究開発センターとの協力事業を通じて、より広く学内でのF工房事業が周知できる体制を作ることができた。まだ同センター経由での学内協働事例はできていないが、事業趣旨には共通する点も多く、今後の発展が期待される。また授業支援活動等を通じて学ファシと接した学生が触発されて、自らも学ファシとして活動を希望するという良い循環が生まれた。

また今年度、本学でのファシリテーションの取り組みを学外に周知できる機会が格段に増えた。他大学との連携では、より広い視点からファシリテーションの意義について考えることができた。また、地域人材の育成事業への参画は、大学ができる地域社会貢献のあり方についての示唆を得た。なお、これらの連携事業を通じて得た人的ネットワークは、外部評価委員という形で今後も協力を得られる見込みである。

[問題点]

1. 本学の組織文化との関係性

本学では授業運営、職員の業務遂行等において指導・管理型リーダーシップが組織文化として根付いており、これが時として教職員の参画の障壁になっていることが感じられた。また、職員については、F工房事業への参加とルーティン・ワークの調整が難しく、研修時間等の設定が課題となった。折衷案として、昼休みの時間帯に実施設定をしたが、参加者の増加にはつながらなかった。

2. 「学生支援 GP」であることの縛り

「合意形成による納得度の高い組織運営」に効果のあるファシリテーションは学内の多くの現場で活用が可能である。実際に、直接的な学生支援ではない事業での協力要請があったが、F工房としての支援はできなかった。これはGP事業であることによる限界であるが、実現すれば大きな波及効果が期待できただけに残念な思いである。

大学教育において、学生を「教える対象」ではなく「学びの主役」として捉えるというパラダイムの転換が起きている。そのために、教育現場にファシリテーションを取り入れることは、まさに時代の要請といえるのではないか。これまでの活動を通じて得た知見や人的ネットワークをもとに、さらに充実した事業構築をしてゆきたい。

北村広美（F工房コーディネータ／全学共通教育センター准教授）

第 2 章 參考資料

広報資料

■ F 工房ホームページ http://www.kyoto-su.ac.jp/path/career/f/f_index.html

The screenshot shows the homepage for the F工房 (Facilitation Workshop) at Kyoto University of Science and Technology. The page is in Japanese and includes the following elements:

- Header:** University logo and name (京都産業大学), navigation links (HOME, サイトマップ, etc.), and a search bar.
- Navigation:** A horizontal menu with categories like 大学紹介, 学部・大学院, 学生生活, etc.
- Main Content:**
 - Section: 「F工房」は、ファシリテーションの発信拠点です。
 - Illustration: A cartoon illustration of four diverse people (two men and two women) standing together.
 - Text: 「お互いの顔が見える」「平等で公平な関係」「自由な発言」「率直な話し合い」「前向きな姿勢」「実りある成果」.
 - Sub-sections: 「F工房について」, 「ファシリテーションしよう」, 「F工房活動の記録」.
- Right Sidebar:**
 - Section: キャリア教育・就職 (Career Education & Job Placement).
 - Menu items: 京都産業大学のキャリア形成支援, コーオペラティブ教育 (Cooperative Education), 「社会人基礎力」育成, etc.
 - Section: F工房 (Facilitation Workshop).
 - Text: 「京都産業大学ファシリテーションの風」に関するお知らせ.
 - Section: イベント・スケジュール (Event Schedule).
 - List of events: 学生支援GP中間報告会「ファシリテーションが実生(めぶ)の大学キャンパス」開催終了いたしました。 (2010.10.04), F工房ミニ講座「対話」をファシリテーションしよう(終了いたしました。), F工房イベント「対話のコツ」話し上手、「聴き上手」をのびそら〜(終了いたしました。)
- Footer:** Copyright information (© 2001-2011 Kyoto Sangyo University) and contact details.

京都産業大学

キャリア教育・就職支援

・フロンティアセッションの意義

1. 何にフォーカスして

企業や団体からフロンティアセッションを開催する企業は増加しています。これは、企業側から求められているスキルや知識、人材の育成に貢献していると考えられています。また、企業側から求められているスキルや知識、人材の育成に貢献していると考えられています。



2. 企業側のコミュニケーションの意義

・最も大切なポイントは対話です



・・・でも、こんなことになりませんか？



・フロンティアセッションは、気づきを生みます！



・開催の流れ

フロンティアセッションのフロー

1. 企業・団体の担当者からフロンティアセッションの開催依頼を受け、開催の意向を確認する。
2. フロンティアセッションの開催日時・場所・参加人数などを企業・団体の担当者から確認する。
3. 開催の準備
4. 開催当日の開催
5. 開催後のフォローアップ

企業側のコミュニケーションの意義

1. 企業側から求められているスキルや知識、人材の育成に貢献している。
2. 企業側から求められているスキルや知識、人材の育成に貢献している。

フロンティアセッションの意義

1. 企業側から求められているスキルや知識、人材の育成に貢献している。
2. 企業側から求められているスキルや知識、人材の育成に貢献している。

学生支援 GP 概要

学生支援 GP の目的

学生支援 GP の内容

学生支援 GP の実施方法

学生支援 GP の詳細

資料請求

■ F工房広報用リーフレット（外面）

いいこと、あるかも。F工房

ファシリテーションのことをもっとよく知りたい人、
 ファシリテーションスキルを学びたい人、
 ファシリテーターで活躍したい人、ともかく体験したい人、
 F工房では活動にかかわってくださる皆さんを広く募集しています。

知恵袋 道具箱 作業場

「ファシリテーション」が盛り込まれた
Fが互いの顔が見える
Fが平等で公平な関係
Fが自由な発言
Fが率直な話し合い
Fが前向きな姿勢
Fが実りある成果

F工房
 Facilitator Mind
 京都産業大学
 キャリア教育開発センター F工房
 〒609-8555 京都市北区上賀茂本山
 TEL : 075-705-1963 内線 (2341) FAX : 075-705-1976
 e-mail : ksu-facilitator@star.kyoto-su.ac.jp
 http://www.kyoto-su.ac.jp/path/career/

京都産業大学で ファシリテーション、 もう、体験しましたか？

平成 20 年度表彰 学生支援 GP
 学生支援プログラム「京都大学ファシリテータータイムアウトの風」
 ～ファシリテーションの定着による学生支援改革～

2010 年度版

Facilitator Mind
 みんなの参加意識や納得を第一と考え、参加者の協働促進につとめる。
 ファシリテータータイムアウトは、「セミヤ夜談」、「ユークル」や「ボランティア」などの
 様々なグループ運営において、場の活性化と個々人の自発的行動を支えます。

POWERUNIV 京都産業大学

F 工房広報用リーフレット (中面)

F 工房でこんなことをやりました


平成 21 年度活動実績 / A...参加対象者 / B...ファシリテーター担当者 / C...主たる活動場所

平成 20 年度採択 学生支援 GP
学生支援プログラム「産産大東フアンリテータータマインドの風」
～ファシリテーションの定着による学生支援促進～
学生支援 GP とは、学生の人数の増加や入学生数の増加に伴って、学生生活の充実や学習意欲の向上を図るために、各学部・各学科に「学生支援プログラム」を推進するための活動費として、平成 20 年度採択されたものです。
GP とは Good Practice の略。

CASE 1 主権事業ファシリテーション研修

A...教職員、学生、学外関係者
B...F 工房スタッフ、外部講師、学生
C...F 工房 他


- ・お昼休みの時間を活用した「ミニイベント」では、「ファシリテーション・クラフティック」や「リアフレイク」など、30 分程度で準備できる内容を中心に実施。教職員・学生間問わず幅広く参加いただきました。
- ・年に 2 回、ファシリテーター研修会として、外部講師を招いての 1 日研修を行っています。



CASE 2 ゼミ支援

A...ゼミ生、教員
B...F 工房スタッフ、学生、教員
C...F 工房、演習室


- ・経営学教員より、「ゼミでもファシリテーションを導入してみたい」という要望がありました。研修から当日の運営補助、振り廻りまでの一連の流れを支援してもらいました。
- ・ゼミ生を支援し、ファシリテーターを募り、研修から当日の運営補助、振り廻りまでの一連の流れを支援してもらいました。
- ・本学教育において重要な位置を占めるゼミにおいて、「当事者参加と合意を促す」というファシリテーションの特色が実証されました。
- ・その他の学部でもゼミ運営の支援(初回アイスブレイク、グループワークなど)を行っています。



CASE 3 高校との連携

A...京都産業大学附属高等学校 2 年生
B...F 工房スタッフ、学生、教職員、(高等学校教員)
C...本教室、演習室


- ・4 回にわたって、「コンビニから見る世界」と題したグループワークを行いました。高校生にとって初めての「先生からの問いに答えるもの」であり、自分から「発言」することは初めて体験した。メンバーの個性が発揮された。ファシリテーターができました。
- ・高校の先生にとっては、これまでの方法論とはまったく異なる方法だったので、ひとつの「試み」になりましたが、その後に実施する「キャリア・デザイン」授業の導入としての礎となりました。



CASE 4 授業への参画

A...学生
B...教職員、F 工房スタッフ、学生、学外関係者など
C...大学、学外関係機関、F 工房

- ・全学共通教育科目として学部・学年を問わず学ぶ教育プログラムを学生に提供しています。そのなかの「キャリア形成支援科目」は、学生の自発的な「気づき」をベースにした自己形成の場を提供し、社会に必要とされる実践力を育む多様なプログラムで構成されています。特に「気づき」を大切にしている科目としてファシリテーター(学部支援者)による授業運営を行っています。学内外のファシリテーターが学生一人ひとりの今年響き高い「気づき」を促します。「キャリア・Re-デザイン」の科目で学んだことが、今年響き高い「気づき」を促します。「キャリア・Re-デザイン」の科目で学んだことが、今年響き高い「気づき」を促します。

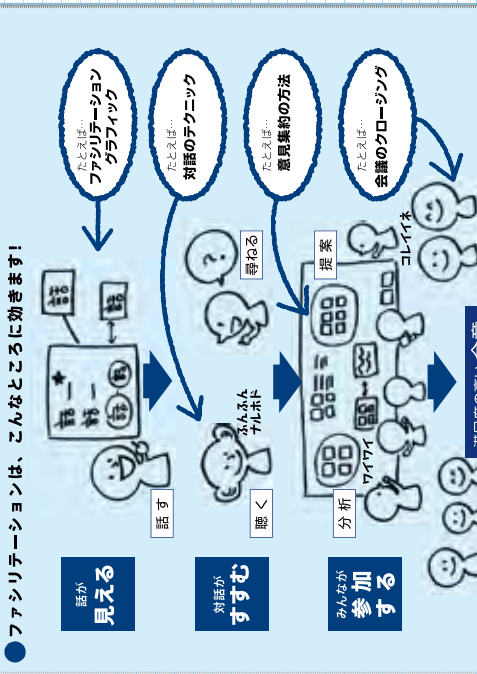


このほかにも、サークル、単発のイベントなど個別の相談にも数多く対応しています。F 工房は、あなたのお越しを心待ちしております。

田中りつる
F 工房スタッフ

キャンパスに「ファシリテータータマインドの風」を起すべく開設された「F 工房」が活動を始めてから 1 年が経ちました。大学の教育環境が「指導型」から「支援型」に大きく転換しつつある今、正課内外の取り組みを支援するファシリテーションのメリットとスキルを身に付けることは大きな意味をもっていきます。ファシリテーションの基本と「F 工房」のこれまでの取り組みが、自分なりのファシリテーターのあり方のヒントになれば幸いです。

●ファシリテーションは、こんなところに効きます!

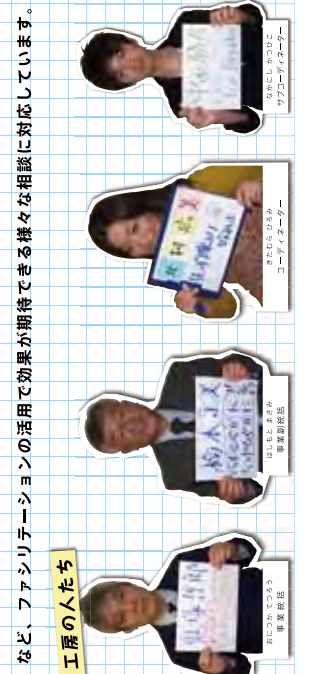


●ファシリテーションは、こんなところに使えます。

- ・会議をうまくまとめたい
- ・授業を楽しいものにした
- ・メンバーの結束を高めた

など、ファシリテーションの活用で効果が期待できる様々な相談に対応しています。

F 工房の人たち



中川あゆみ 事業部長
山本 幸夫 事業部長
藤原 真由美 コーディネーター
高橋 かつら子 コーディネーター

■ 文部科学省 GP ポータル

利用規約 | 個人情報ポリシー | サイトマップ | リンクについて | お問い合わせ

文部科学省

ホーム | 合同フォーラム | GPリスト | 定期特集 | イベント情報

プログラムのリスト > 新たな学びのコースに向けた学生支援プログラム > 京産大発ファシリテータマインドの風

京都産業大学

京産大発ファシリテータマインドの風

平成29年度
新たな学びのコースに向けた学生支援プログラム
京産大発ファシリテータマインドの風

本取組の特長には、2005年度より開始している低単位・低履修学生を対象とするキャリア形成支援科目があります。この科目においては、ファシリテーションスキルを導入し、「指導型」というよりも「支援型」の授業運営を行っています。多様な学生層を支援するにあたり、個としての学生を活性化し自律を促すうえでファシリテーションのスキルが極めて効果的であることが、同科目の授業運営および研究活動を通じてのわかってきました。

本取組は、このような知見を学生支援領域全般に適用し、正規内/正規外、F/O/S/Rを横断するさまざまなプログラムに組み込むことで、プログラムの主たる対象となる低単位・低履修層および中間層の学生における有感性の醸成を促進し、最終的に彼らにおける個別活性化と自律を促すことを目的としています。

このような目的を達成するため、キャリア形成支援科目受講生の持てるすべての学生、教員、職員に向けファシリテーションの普及推進の拠点となる「F工房」を開発し、「既存の学生支援プログラムの改善づくり」、「F/O/S/R関連のワークショップの広業・整備・評価」、「学生によるファシリテーション・ツールの開発」の三つの事業を行っています。このことを通じて、学生支援領域全体に円滑スキルが定着し、浸透していくことが期待されています。

資料等

- [平成29年度版リーフレット \(1.4MB\)](#)
- [平成28年度版リーフレット \(1.2MB\)](#)
- [平成29年度学生支援プログラム集掲載 \(追加版\) \(1.4MB\)](#)
- [平成29年度学生支援GP中間報告会 発表資料 \(1.6MB\)](#)

リンク

- [F工房「京産大発ファシリテーションの風」ホームページ](#)

このGP取組に対する感想を投票してください

「参考になった」「どちらでもない」「参考にならなかった」

投票

このGP取組に関する簡単なアンケートにお答え下さい

[アンケートに答える](#)

合同フォーラム | GPリスト | 定期特集 | イベント情報
利用規約 | 個人情報ポリシー | サイトマップ | リンクについて | お問い合わせ

本サイトの著作権は合同フォーラム推進事務局に帰属します

ファシリテーション実践現場の写真

■ F工房での会議



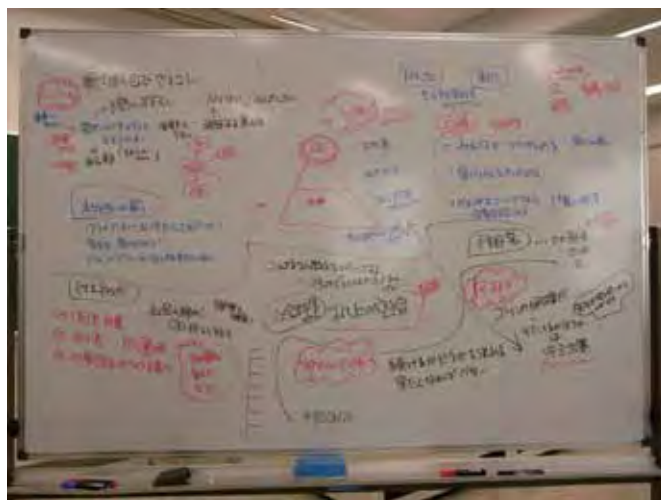
高大連携授業「附属高校がもし 100 人の村だったら」(p.35 参照) についての打ち合わせ。ホワイトボードを使って、F工房スタッフと学生ファシリテータがプログラムデザインを行っている様子。

学生支援 GP 中間報告会第 2 部「作業場セッション」(p.29 参照) についての打ち合わせ風景。F工房スタッフと学生ファシリテータが協働で行っている。ファシリテーショングラフィックは、学生ファシリテータが担当している。



「ウォーミングアップ・セミナー」(p.36 参照) の担当スタッフでのミーティング。当日の段取りについて最終確認を行っているところ。手前の机には、付箋紙で流れを出し合った跡が見える。

■ ファシリテーショングラフィック



「第11回ファシリテータ研修会」(p.8参照)でのホワイトボードの使用例。「(初回)授業をどうファシリテーションするか?」について、グループでの話し合いの様子をグラフィック化したもの。線で区切ることでブロックを明確化している。



フリップとホワイトボードの活用例。「第10回ファシリテータ研修会」(p.5参照)のゲストファシリテータであった川中氏によるもの。板書の代わりにフリップを貼ることによって、整理され見やすくなると同時に、今までの話が時系列ごとになっているので、後から見直した時にも分かりやすい。



「学生寮新班長合同宿泊研修会」(p.33参照)での成果物。その日にツールの使い方を紹介したばかりにもかかわらず、きれいにまとめられている様子が見てとれる。

■ 授業運営支援



高大連携授業「附属高校がもし 100 人の村だったら」(p.35 参照) の一場面。高校生が慣れないグループワークを行っている。そしてそれを支援するファシリテータ。



「自己発見と大学生生活 (p.40 参照)」でのアイスブレイクの様子。固定机の大教室授業で受講生約 210 名をグループに分けてワークを実施した。椅子と机が固定されているため少し話しづらそうだが、グループ人数を 3 名にすることで、それを緩和している。

■ 研修会



F工房合宿 (p.16 参照) において「ワークショップデザイン」を体験するグループワークの様子。付箋紙に出された意見を、カテゴリー化し分かりやすくしている。



キャリア形成支援科目を担当する職員を対象にファシリテータ研修を実施中 (p.11 参照)。学生ファシリテータも参加し、協働しながら「情報共有ワークショップ」に奮闘中。



第10回ファシリテータ研修会 (p.5 参照) において「教育とファシリテーションを考える」ワークショップで意見交換を行った後、外部講師によるまとめをしている様子。今まで参加者が書いたフリップを床に並べていく手法が印象的。



学生寮新班長合同宿泊研修会 (p.33 参照) において「もし、100万円の予算が寮にプラスされたら」をテーマに、その企画案を発表している様子。どの模造紙もカラフルで見やすいものとなっていた。

■ 平成 22 年度学生支援 GP 中間報告会 (p.18 参照)



第 2 部「道具箱セッション」の様子。付箋紙を使った自己紹介の手法（「Q&A」）を参加者で体験している。（P.26 参照）



左上 受付準備の様子。F 工房スタッフと学生ファシリテータが協働しながら、名札を並べている。

右上 会場設営の様子。登壇する人どうしで話し合い、場のデザインを行っているところ。



左下 報告会の最後に、学生ファシリテータを紹介しているところ。本報告会では 9 名の学生ファシリテータが実行委員として参画した。

F工房スタッフ

事業統括	鬼塚哲郎（文化学部教授）
事業副統括	橋本正美（全学共通教育センター教授）
コーディネータ	北村広美（全学共通教育センター准教授）
サブコーディネータ	中西勝彦（キャリア教育研究開発センター）
事務職員	岡田ひづる（キャリア教育研究開発センター）

平成20年度採択 「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

京産大発ファシリテータマインドの風

～ファシリテーションの定着による学生支援改革～

平成22年度 活動報告書

平成23年3月31日発行

発行・編集 京都産業大学キャリア教育研究開発センター F工房

〒603-8555 京都市北区上賀茂本山

TEL：075-705-1963 FAX：075-705-1976

E-mail：ksu-f-acilitator@star.kyoto-su.ac.jp

道具箱

知恵袋

作業場



京都産業大学
キャリア教育研究開発センターF工房